ISSN 0915-6119

CIRCULAIRE DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES
n° 22 Kyoto-Tokyo, février 1998

通信

日仏東洋学会

1998年2月 東京・京都 第22号

日仏東洋学会

会　　長：福井　文雅

名誉会長：ANSART, Olivier　・　山本　達郎　・　WASSERMAN, MICHEL

顧　　問：秋山　光和　・　江上　波夫　・　藤枝　晃　・　市古　貞次
　　彌永　昌吉

評議員：　竺沙　雅章　・　DURT, Hubert　・　福井　文雅　・　濱田　正美
　　羽田　　正　・　池田　　温　・　石沢　良昭　・　石井　米雄
　　彌永　信美　・　狩野　直禎　・　加藤　純章　・　興膳　　宏
　　桑山　正進　・　京戸　慈光　・　前田　繁樹　・　松原　秀一
　　御牧　克己　・　森　由利亜　・　森安　孝夫　・　明神　　洋
　　中谷　英明　・　大谷　暢順　・　斉藤　希史　・　坂出　祥伸
　　高田　時雄　・　田中　文雄　・　坪井　善明　・　八木　　徹
　　山田　利明

代表幹事：興膳　　宏

幹　　事：濱田　正美　・　石沢　良昭　・　前田　繁樹　・　御牧　克己
　　明神　　洋　・　中谷　英明　・　斉藤　希史　・　高田　時雄
　　八木　　徹

監　　事：加藤　純章　・　岡本　さえ

会計幹事：森　由利亜

推薦委員会：福井　文雅　・　池田　温　・　加藤　純章　・　興膳　　宏
　　御牧　克己　・　山本　達郎

本　　部

〒162 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部　　福井文雅研究室

事　務　局

〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部　　興膳　宏研究室

TEL:075 753 2808

編　　集

〒112 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学文学部中国哲学文学科　山田利明

入会・会費(3,000円)

〒162 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部　　森　由利亜

表紙　題字　　元の趙孟頫の六体千字文から
　　高田時雄氏集字
　　カット　イラン陶器模様（13世紀）から
　　桑山正進氏描画

日仏東洋学会会則

第１条　本会を日仏東洋学会と称する。

第２条　本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に，交流と親睦を図るものとする。

第３条　本会の目的を実現するため次のような方法をとる。
（１）講演会の開催
（２）日仏学者の共同の研究及びその結果の発表
（３）両国間の学者の交流の促進
（４）仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する
（５）日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する

第４条　本会の本部は日仏会館におき，事務局は代表幹事の所属する機関内におく。

第５条　本会会員は本会の目的に賛同し，別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。

第６条　正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。

第７条　本会は評議員会によって運営され，評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は２年とするが，再任を妨げない。

第８条　評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は２年とするが，再任を妨げない。
会長　１名　　代表幹事　１名　　幹事　若干名　　会計幹事　１名
監事　２名
日仏会館フランス学長は，本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。

第９条　会長は会を代表し，総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。

第10条　年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き，会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。

第11条　本会の会計年度は３月１日より２月末日までとする。

第12条　この会則は総会の決議により変更することができる。

第13条　以上の１条から12条までの規定は，1989年４月１日から発効するものとする。

STATUT DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

Art.1　Il est formé une association qui prend le nom de Société franco-japonaise des Etudes Orientales.

Art.2　L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Etudes Orientales.

Art.3　Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants:
1 - Organisation de conférences,
2 - Etudes et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats,
3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays,
4 - Organisation de réunions amicales entre scientifques français et japonais, notamment à l'occasiondes vistes des scientifiques français au Japon,
5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.

Art.4　Le siège de la Société est établi dans la Maison franco-japonaise et le bureau à l'établissement auquel appartient le secrétaire général.

Art.5　Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation. La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.

Art.6　La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.

Art.7　La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont elus par L'Assemblée Générale des membres. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.

Art.8　Le Conseil d'Administration élit dans son sein:
- 1 Président - 1 Secrétaire Général
- Plusieurs secrétaire - 1 Trésorier - 2 Auditours.
Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles.Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statuairement président d'honneur. En outre,
l'Assemblée Générale peut élir un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.

Art.9　Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le Président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.

Art.10　L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Adiministration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.

Art.11　L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.

Art.12　Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.

Art.13　Les dispositions statuaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le premier avril 1989.

日仏東洋学会　通信　第22号　1998年2月　発行

CIRCULAIRE DE LA SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

n° 22　1998

目次

フランス極東学院院長旧友ロンバール君の
急逝を悼む …… 福井　文雅 …… 1
ギィ・ガニョン氏を哭す …… 興膳　宏 …… 3

『スッタニパータ』について …… 中谷　英明 …… 4

第35回ICANASパネル「日本人の目を通してみた中国宗教」
に参加して …… 森　由利亜 …… 14

1997年－1998年度コレージュ・ド・フランス、高等研究院
開講講座 …… 17

新刊紹介
ペリオ著・フォルテ校訂『西安府の景教碑文研究』
ストリックマン著『真言と高官－中国密教研究論集』
雑誌目次紹介
…… 菊池　章太 …… 22
ジュリアン著・興膳他訳『無味礼讃』
グラネ著・明神訳『中国古代の舞踏と伝説』
…… 山田　利明 …… 27
彙報・総会報告 …… 28
1997年度会員名簿 …… 32

フランス極東学院院長旧友ロンバール君の急逝を悼む

福井文雅

1月12日に開かれた東京日仏会館の新年祝賀会の席上、デュルトH. Durt 氏がこっそりと私に、「ドゥニ・ロンバール Denys Lombard 教授が亡くなった事を御存知ですか」と声をかけて来られた。「何ですって！ 一体それは何時？」と私は仰天し慌てて訊ねると、「1月8日。原因は難しい病名で、後でお知らせします。」とのこと、私は一昨年（1996）パリ在住中の11月13日夕方、中国研究所三階で開かれた或る出版記念会でロンバール氏を遠くから見かけ手を振ると、彼も手を振って羞じらい氣味の笑みを返してくれた時のことを思い出していた。その彼が亡くなってしまったとは！ 帰宅して私は、令夫人クローディンヌ・サルモン Claudine Salmon に当てて、急ぎ弔文を綴った。

実は、ロンバール氏と私は、パリでお互い学生時代以来の長い付き合いであった（従って、以下は君付けで書くことをお許し願いたい）。パリの中国研究所は今でこそパリでも大分東に寄った感じのする地区に在るが、30年前では、同じ5区でもパリ大学ソルボンヌの中に在ったものである。リシュリュウ廊下に入口があり、そこから階段を降りると、図書室がぐるりと周囲を囲む形の大部屋がそれであった。その片隅に事務扱いの職員達の席があった。

1962年頃、そこへロンバール君はいつもよく本を借りに来ていたものである。「彼は大変な勉強家だ」と言う噂話を事務員から聞いた日のことを、私は今でも昨日のように覚えている。当時彼は中国学を勉強していたのであった。

しかし、彼は中国学だけを勉強していたわけではない。フィリオザ Jean Filliozat 教授が Collège de France での古代インドと西欧世界との交渉を講義しておられた1962年の頃、私は同じ受講生の中に彼を発見した。

当時彼は、ソルボンヌ続いて高等研究院で歴史系授業を聞く傍ら、パリの東洋語学校でマレー・インドネシア語、漢語、カンボジア語、シャム語を習得している最中であった。

彼と私との交友はその頃から始まっていた。

或る日彼は、「来週からセデス教授の特別集中講義がインド学研究所で開かれるから、貴方も聴きに来ない？」と誘ってくれた。インド学研究所は当時中国研究所に隣りあわせであった。行って見ると、ドイツから教授引率でパリまで来ている多数の学生を対象に、セデス G. Coedès教授が「クメール文化史」の特別講義をするところであった。

その時の数日間の講義ノートはまだ取ってある。講義内容もさることながら、セデス教授とドイツ人引率教授との打々発止の問答が、私には極めて刺激的であり、そういう場を与えてくれたロンバール君には感謝したものである。

その後暫く彼との交際は途絶える。26歳で彼が1964年から1年間給費留学生として北京大学歴史系に留学し、直ぐ続いて1966年から3年間、フランス極東学院研究員としてジャカルタに滞在して、本格的にインドネシア史を専攻するようになったからである。そして1969年に高等研究院の社会科学部門のDirecteur d'études として Histoire de la Méditerranée sud-est asiatique（東南アジアの地中海史）の講座を開設、1990年52歳でパリ大学第4で文学博士号を取得、57歳でレジオン・ドヌール（シュヴァリエ騎士）勲章を授かっている。

その間直接の交流は途絶えてはいたが、私達二人の間で、論文や著書の遣り取りは続いていた。例えば、1990年に三部作 *Le carre-four jawanais* 『ジャヴァの四辻』（インドネシア語訳もある）を贈ってくれている。

ロンバール君の処女作は、クセジュ文庫の *La Chine impériale*, Paris, 1967（帝政中国）であった。四版を重ね、ポルトガル語訳もある。実は、その邦訳を私が出すはずであった。しかし、私が怠慢で日の目を見なかった。この場を借りて、令夫人にお詫びの言葉を送らねばならない。

ロンバール教授の令夫人クローディンヌ・サルモン Claudine Salmonは東南アジア史の専門家として知られ、その実力は夫君に勝るとも劣らぬ、と評判が高い。御夫妻での共著や共編の著作も数点あり、*Les Chinois de Jakarta, temples et vie collective*『ジャカルタの中国人．寺院と共同生活』 Paris, 1980がその一例である。

私の弔文に対する返事の中で、「学問上でもいかに二人が協力して来たことか、その事をこれまで以上に日々実感しています。一人だけで平衡を保つのは容易ではありません」と書いて来ておられる。

ロンバール君は1938年２月４日のマルセーィユ生まれであった。その彼が、何故東南アジア研究、特にインドネシア研究に打ち込むようになったのか、何時か聞こうと思ううちにその機会を永遠に失ってしまった。令夫人にいつか聞かねばなるまい。

彼は1993年１月にフランス極東学院の院長に就任した。院長としてアジアにある各支部を訪ねることになり、早速日本にやって来た彼から、「福井に会いたい」と言う連絡が入った。久し振りに会ったロンバール君は、白皙の美少年の面影を残し、相変わらず品の良い微笑みをたたえる物静かな男であった。

「新任の院長として訪日したので、日本のどう言う人に会い、どこの研究機関に行ったら良いか、相談に乗って欲しい」これが、彼の相談であった。勿論私に否応は無く、然るべく情報を伝えて別れた。

去年の春、一年以上のパリ滞在を終えて帰国した私に、思いがけずも日本学術会議に出て「国際学術交流・協力」に当たる事態が起った。具体的にはアジア諸国との交流である。となれば今度は私の番で、フランス極東学院院長としてアジア諸国にネットワークをもつ彼に相談したい事が沢山ある。「ロンバール君が生きてさえいて呉れれば」と嘆く事態が、一再ならず今後起こるであろう。

上に述べたように、彼は中国学から出発して東南アジア研究に向かったので、漢字文化圏とインド文化圏、その周辺地域の文化に通じていた。このように、アジアの両辺に目が届く人はフランスでも多くは無く、最近ではむしろ少なくなりつつある。

こういう状況を見れば見るほど、ロンバール君の急逝が、フランスばかりでなく実は日本にとっても大きな痛手であり、取返しの付かない損失であった感を深くする。

何と言っても、60歳での去世は余りにも早過ぎた。旧友との在りし日々を様々に想い出し、哀惜の念を禁じえない。　　合掌

〔追記〕本記事について、石沢良昭上智大学教授（本学会の評議員・幹事）から一部資料の提供を受けました。ここに深謝致します。

ロンバール教授の学問については、山本達郎名誉会長が東方学会誌『東方学』に執筆なさる予定です。　　— 1998 年２月—

ギィ・ガニョン氏を哭す

興膳　宏

中国史学の研究者として知られるCNRS研究員ギィ神ガニョン（Guy Gagnon）氏が、一九九七年三月二日、急逝された。ガニョン氏の編纂になる『史通與史通削繁通検』（一九七七年）は、数字のみによる独特の方式を用いた『史通』の一字索引で、『史通』研究のために大きな便宜を提供した労作である。また、一九八八年には、劉知幾の歴史観に関する論文（髙La Notion d'histoire chez Liu Zhiji fonctionnaire-historien à l'éoque des Tang"）で、博士の学位を取得された。三月十一日、サン＝ジェルマン神アン神レイ教会において、葬送のミサが執り行なわれ、同日夕刻、遺体はペール神ラシェーズにおいて火葬に付された。遺骨はいまカナダのケベック州にある同氏の故郷に眠っている。心からご冥福をお祈りする。

以下の文は、ガニョン氏の逝去後、同氏の友人の求めに応じて草したものである。

＊

ギィ・ガニョンさん、あなたの突然の訃報に接し、ほんとうに驚きました。あなたの友人の一人として、悲しみに堪えません。心から哀悼の意を表します。

思えば、あなたと初めて会ったのは、ぼくが最初にパリに行った一九八二年の春でした。毎週月曜日の四時過ぎ、ディエニ先生の講義の後で、いつもソルボンヌの近くのカフェであなたとおしゃべりをするのが、ぼくの楽しみでした。フランスやパリについての情報は、あなたから得ることが最も多かった。まだパリに来たばかりで、右も左もわからないぼくには、あなたの存在はほんとうに有り難いものでした。それに、あなたの日本語の流暢で達者なこと。あなたと話しているとき、ぼくはほとんど外国人を相手にしていることを忘れていました。

八六〜八七年にパリに一年間滞在したときも、時折あなたと会って、歓談を楽しみました。とりわけ印象に深いのは、クリスマスの休暇に、映画の大好きなあなたが、当時封切られたばかりのショーン・コネリー主演「薔薇の名前」（Le nom de la rose)をぼくにプレゼントしてくれたことでした。あいにく、そのころ国鉄（SNCF）のストが長く続いていて、郊外に住んでいたぼくは、あなたとの約束の時間に間に合うよう、二時間も早く出かけていったものでした。映画の内容は中世の修道院を舞台にした推理もので、時代背景などぼくにはよく理解できないところも多かったけれど、映画が終わってからのあなたの親切な解説で、大体のことが呑み込めました。あなたは毎週二三回は必ず映画を見るという映画通だったから、その蘊蓄をもっと聞いておけばよかったと後悔しますが、ぼくの貧しい映画の知識で果たして理解できたかどうか、自信はありません。

八八年にあなたが日本に長期滞在していたとき、当時執筆中だった『史通』の学位論文のために、あなたは月に何度も東京から京都まで通ってきて、ぼくの意見を求められました。長い努力が実って、あなたの博士論文を手に取ったとき、パリや京都であなたとともに『史通』のテクストを読んだ日々のことが思い出されて、ぼくも満足感に浸りました。

昨年の初冬に、ぼくがCollège de Franceで講義を行なったとき、あなたは毎回必ず出席して、最前列で熱心に聴講してくれました。そのときの様子では、気がかりだったあなたの健康状態も以前よりはずっと良い感じだったので、ぼくはすっかり安心していました。講義の準備であわただしい時間を送っていたので、以前のようにあなたとゆっくり話をする機会が得られなかったのが心残りでしたが、あれが永訣になろうとは、夢にも想像できないことでした。

では、さようなら、ギィ。名残はいつまでも尽きませんが、どうか安らかにお休みなさい。あなたが天国で、好きな映画を楽しんでいる姿を思い浮かべています。

一九九七年三月十日

京都にて　　興膳　宏

『スッタニパータ』について

中谷 英明
神戸学院大学・人文学部

＜目次＞

はじめに
1. 『スッタニパータ』の４層
(1) 層分けの根拠
(2) 『スッタニパータ』の４層
2. ４層および「法句経」の比較
(1) 文法と語彙
(2) アヌシュトゥブ奇数行の韻律
表１ Śathapatha Brāhmaṇa
表２ Suttanipāta, Vaggas IV & V
表３ Suttanipāta, Vaggas I ～ III
表４ Suttanipāta, Vaṭṭhugāthā
表５ Dhammapada
表６ 『スッタニパータ』平行詩節対応表

はじめに

『スッタニパータ』は，現存する膨大な仏典の中で，最古層の伝承をもっともよく伝えるテキストである。言い換えれば，仏陀自身の教説を知る上で，もっとも直接的な資料である。しかしながらその内容はなお十分解明されておらず，主要語にさえ意味不明瞭なものが少なくないのが現状である。

従来は，Mahā-niddesa, Culla-niddesa, Paramatthajotikā 等の注釈文献を利用し，そこに披瀝される解釈を適宜取捨して，本文解釈が行われて来た。両 Niddesa は，『スッタニパータ』の注釈文献でありながら聖典と位置付けられるほど早期に（紀元前２～１世紀頃）成立したと推定される。しかしなお『スッタニパータ』最古層の成立からは，後に一端を述べる諸種の事情を勘案すれば，２世紀近く遅れるであろう。他方，５世紀の Buddhaghosa の著した注釈 Paramatthajotikā は，時に３世紀初頭の漢訳『義足経』と共通の因縁物語を詩節に添える事実からして，その原資料は紀元初頭まで遡る可能性があるが，注釈内容は明らかに両 Niddesa を承けており，より成立が遅いことは確かである。先に述べた用語解明の第一の困難は，このような，原伝承と注釈との時代的懸隔による注釈における原意逸失によるものである[1]。

理解を妨げている第２の要因は，『スッタニパータ』の成立事情に関わる。５章 (vagga) から成る『スッタニパータ』の前部３章は後部２章に比して成立が遅いという仮説は早くから提唱されているが，これを具体的に検証する研究は多くない[2]。さらに詳細な分析のためには，「散文」と，「来歴を述べる詩節群」とを区別する必要がある。このように『スッタニパータ』を４層に分かって分析を試みると，諸種の事象が層によって異なる現れ方をすることが発見された。本稿はその概要報告である。

数世紀を隔て，その間の教団の急速な拡大とともに生じた教理上の変化を反映する４層を区別することなく，一貫した思想体系を求めようとした所に従来の困難はあったと筆写は考えている。各層の理解は，直前あるいは同時代に成立したとみられる諸 Upaniṣad やŚathapatha-Brāhmaḍa 等と比較し，各層を思想史的発展中に位置付けつつ行う必要があろう。ここに述べることは，そのような将来展望の下におけるささやかな一歩である。

[1] Mahā-niddesa でさえ，２種の解釈を与えることがしばしば見られ，その多くの場合，本来の意味が失われていたことを示唆する。

[2] 例外をなすのは荒牧典俊氏（京都大学人文科学研究所教授）の研究である。「ゴータマ・ブッダの根本思想」岩波講座東洋思想『インド仏教 I』東京・1988 年 pp.61-98 のほか，数編の論文がある。本稿は，この荒牧教授の所説の延長線上にある。K.R. Norman 氏もその訳注解題において若干の指摘を行っている：The Group of discourses (Sutta-nipāta), Vol. II, Introduction, s.v.

1. 『スッタニパータ』の4層

(1) 層分けの根拠

現存する『スッタニパータ』は，1149詩と若干の散文を含み，5章から成っている。しかし『スッタニパータ』の名は北伝に確認されず，現形編纂はかなり後代のことらしい。次の根拠によって，後部2章は，前部3章よりも古く成立したと推定される。

1. 上述の如く，4章・5章に対する注釈は，注釈として扱われず，Niddesaの名で聖典とされる[3]。これは両章の成立が格段に早かったために，その注釈までが聖典に所属せしめられたものと解釈される。
2. ニカーヤ・阿含中で『スッタニパータ』詩節が引用される時，4章・5章の詩節は章名を添えて引用されるが，前部3章の詩節は出典が明示されない。
3. しかもニカーヤ・阿含と共通する『スッタニパータ』詩節は前部3章に著しく，後部2章については，上記の，章名を特定して引用される小数の場合を除き，無いに等しい（本稿末尾の表6参照）。これはニカーヤ編纂時には既に後部2章は定立されており，伝承の重複を回避したものと解される。出典明示の事実とともに，4・5章編纂がニカーヤ編纂にかなり先行することを示唆する。
4. 漢訳『義足経』（220年代に訳出）は第4章Aṭṭhaka-vaggaの訳である。また4章は，サンスクリット版の一部が中央アジアから出土している。すなわちコータン写本は814〜846詩を，西域北道出土の断片は912〜975詩を含む。この事実は北伝においても，第4章が単独経典として伝承されたことを示す[4]。

以上4点のうち，第2点と3点は，従来比較的看過されて来た事実である。稿末に掲げた表（表I）は，最近矢島道彦氏が公刊された『スッタニパータ』詩節と他文献との詳細な対応表に主として基づき作成したものである[5]。この表によるのみでも，前3章と後2章の差異は歴然であろう。

以下の検討においては，さらに次の2部分を区別する。

1. 因縁詩 (Vatthu-gāthā)
2. 散文

Culla-niddesaは，5章に収められる仏陀と諸弟子との問答詩群がいかに成立したか，その来歴を述べる5章冒頭の詩節(Sn 976-1031)には注釈を付さない。これらはParamatthajotikāによっては「因縁詩」(Vatthu-gāthā)と呼ばれ，Niddesa編纂時には存在しなかったと思われる。同じく「因縁詩」とされる詩群は2，3章にもあり(Sn 335-336; 679-698)，これら78詩は別に扱うこととする。

また，散文も別扱いとする。

(2) 『スッタニパータ』の4層

このようにして，『スッタニパータ』を次の4部分に分かち，I〜IV層の名で呼ぶ。

I層: Vaggas IV, V (766–976, 1032–1149) [= ls2]
II層: Vaggas I 〜 III (1–678, 699–765) [= fs3]
III層: Vatthugāthā (335–336, 679–698, 976–1031) [= vtt]
IV層: 散文部 [= prs]

さらに詳細に見れば，例えばCulla-niddesaは第1章「犀角経」(Sn 35-75)には注釈するから，これを古層（＝I層）と見ることは可能である。あるいは，第5章末尾の賛嘆詩群(Sn 1124-1149)やTuvaṭaka-sutta (Sn 915-934)は，内容上やあるいは韻律上（Āryāという新形）から，

[3] ただしCulla-niddesaは，5章の因縁詩Vatthu-gāthā (Sn 976-1031)には注を付さず，また第1章「犀角経」(Sn 35-75)の注釈を含む。

[4] A.F.R. Hoernle, 'The Sutta Nipāta in a Sanskrit version from Eastern Turkestan', *JRAS*, pp.709-32; W. Clawiter & L. Holtzmann, *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil IV, Wiesbaden, 1965, Nr. 662. さらにL. Sander & E. Waldschmidt, do, Teil. V, 1980, pp.236-7, Nr. 50には一連の『スッタニパータ』対応詩節があるが，これらは『スッタニパータ』からランダムに詩節を引用する他経典（阿含）の一部と思われる。

[5] 矢島道彦編「Suttanipāta対応句索引」「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第2号，平成9年3月 pp.1-97. なお，この表に，前注に記したHoernle校訂のサンスクリット写本への言及が脱落していることは，大変な労作であるだけに惜しまれる。

Niddesa に註されるものの，後代付加と見ることもできる。このようにさらに精密な分析は必要であるが，先ずは全体の大筋を把握するため，上記 4 層について検証された結果をここに報告する。

以下の比較には，以上 4 層の他に，

『法句経』(Dhammapada) [= Dh]

も比較対象として加える。

2. 4 層および「法句経」の比較

(1) 文法と語彙

以下に示す対照表は，個々の文法事象・語彙について出現回数を数えたものである。

i. 文法事象

事象＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
-m-	12	9	4	–	3
-y-	4	1	–	–	–
-d-	–	6	–	2	–
carahi[-.]	2	–	–	–	–
[vv.]	–	–	3	–	–
tumo	2	–	–	–	–
attā	1	–	–	–	4
ātumānam	3	–	–	–	–
attānam	2	8	–	1	16
tuvam	5	13	–	–	–
tvam	9	11	1	7	–
-āse (n.ml.)	17	4	–	–	–
jarasā (inst.)	2	–	–	–	–
-tave	2	2	–	1	2
-tum	3	13	–	3	4

先ず正書法に関しては，つなぎ子音-m-，-y-は全体的に使用されるが，-d-は I 層（後部 2 章）に見当たらない。次に子音群の扱いを見ると，間投詞 carahi（「確かに」）は I 層では韻律上 2 音節，III 層 (Vatthugāthā) では 3 音節に扱われる。また attaṅ(=Skt ātman) の主格単数および対格単数はそれぞれ attā，attānam が一般に使われ，分かち母音-u-を伴う，tumo（attan の主格単数）および ātumānam (attan の対格単数) 両形は，ともに I 層に限られる。他方同じ分かち子音を伴う形であっても，tuvam は，II 層にも用いられるが，IV 層（散文）で見られないことが注目される。

tuvam について，ニカーヤ，ヴィナヤまで調査の範囲を広げると，4 ニカーヤには定型句および韻文に 10 例，『テーラ・テーリーガーター』（韻文）に 80 例のほか，『ジャータカ』の韻文に多数が検証される。従って tvam という形のみを用いる『スッタニパータ』散文（IV 層）は，定型句を除いたニカーヤ散文の状況と一致することになる。

名詞曲用では，a 幹・主格複数の-āsaḥ（2 重複数語尾-ās + as）の東部中期インド形-āse は I 層で多用され，II 層にも小数ながら見えるが，以降は姿を消す。「老い」の古形 jaras の具格単数 jarasā は I 層のみに見える。

動詞形については，ヴェーダ以来の与格の不定形 -tave は II 層以降に古典サンスクリットと共通の対格不定形 -tum に大幅に席を譲っている。

以上のように，各層によって異なる使用語形を確認できること，また-āse や jaras-等，古形は古層に検証され，-tum のような古典期の標準形は II 層以降の新層に頻用されることが判る。

なお，-āsaḥ は，『リグヴェーダ』以降（引用を除き）消滅し、古来の-āḥ が中期インド語を含めて全面的に使用されることになる。アショーカ碑文にも，西部碑文の 2 例を除きこの形はないから、この-āse を含む『スッタニパータ』詩節はアショーカ時代以前の作である可能性が高い[6]。

ii. 比丘と覚者（表は次頁）

語彙について見ると，比丘 (bhikkhu) は，I 層には複数形が現れない。覚者 (buddha-, sambuddha-) も同様である。I 層に描写され，勧奨される修行生活は僧団を前提することなく，ひたすら孤独の遊行であるのに対し，複数の比丘に対する呼び掛けを含む II 層の次のような詩は，僧団生活の始まりを示唆する。上の検証結果は，このような事実と無関係ではあるまい。

[6]なお，ヴェーダ語形から古典期サンスクリットへの言語的発展史の中にパーリ語を含む中期インド語を位置付ける作業は，Jules BLOCK, *L'Indo-aryan* 以来継続中であるが，最新の成果は，Michael WITZEL, 'Tracing the Vedic Dialects'. *Dialectes dans les littératures indo-aryennes* (éd. C.Caillat), pp. 97-266, Paris, 1989 に纏められている。

語彙＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
bhikkhavo(voc)	–	3	–	–	2
bhikkhave(voc)	–	–	–	17	–
bhikkhu-(pl)	–	4	1	7	1
bhikkhu-(cmpd)	–	3	1	24	–
bhikkhu-(sg)	22	45	–	38	24
bhikkhate	–	–	–	–	1
buddha-(pl)	–	5	–	–	6
sambuddha(pl)	–	–	–	–	1
buddha-(sg)	5	22	9	9	9
buddha(cmpd)	1	3	–	1	5
sambuddha(sg)	2	8	7	–	–
sambuddha(cmpd)	–	1	–	–	–
sambudh-	–	1	–	–	–
sammāsambuddha	–	2	–	3	3

280. yaṃ evarūpaṃ jānātha
bhikkhavo gehanissitaṃ
pāpiccaṃ pāpa-saṃkappaṃ
pāpa-ācāra-gocaraṃ
281. sabbe samaggā hutvāna
abhinibbijjayātha naṃ
kāraṇḍavaṃ niddhamatha
kasambuṃ apakassatha

「比丘たちよ，そのような，俗的生活に馴染み，悪を好み，悪巧みをし，品行が悪い者を知った時には，あなたがたは一団となって，そのような者を追放しなさい。籾（もみ）を吹き飛ばしなさい。朽ち木を投げ棄てなさい。」

なお，bhikkhu の 2 種の複数呼格形のうち，bhikkhavo はII 層に限られ，東方語形とされる bhikkhave はIV 層（散文）にしか現れない。IV 層は『スッタニパータ』の最新層であるから，この事実は，東方語形を，西部中期インド語であるパーリ語に残存する古い要素と見なす従来の仮説の見直しを迫るものである。

そこでニカーヤ全体とヴィナヤまで検証範囲を広げて見れば，先ず韻文においては，bhikkhave の用例は見当たらない[7]。bhikkhavo は小数ながら存在する。これに対し散文においては，膨大な用例はほぼ bhikkhave に限られる。その例外をなすのは，具足戒の際のブッダの認可の言葉（ヴィナヤ:etha bhikkhavo ti bhagavā avoca）と、比丘たちとの対話開始の定型句（ニカーヤ:bhagavā bhikkhū āmantesi. bhikkhavo ti, bhadante ti.）の 2 定型句のみである。

以上の事実は，bhikkhavo が古くからの伝承形であり，その記憶が上記 2 定型句に残存していると解される[8]。

この状況は、同じ東方語形である先の-āse とは逆である。古形-āse は対応ヴェーダ語形と同じく早期に消滅したが、後に東インドからマールワーに至る地域に形成された「東部コイネー地帯」の仏教教団中で市民権を得た新形 bhikkhave は、広く使用されることになったと推定されるが，この点に関してはさらに詳細な検討を要する。

iii. 修行者と信者

語彙＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
muni-	33	36	1	–	7
mona-	–	8	1	–	2
samaṇa-	12	20	–	44	5
paṇḍita-	5	11	2	–	22
sugata-	–	4	–	4	2
tathāgata-	1	20	2	2	2
arahat-	–	13	1	9	4
sāvaka-	–	12	–	1	8
upāsaka-	–	2	–	6	–
āyasmat	–	–	27	14	–
thera-	–	–	–	2	2

その他の修行者・仏弟子・在俗信者の呼称を検証すると，I 層で修行者を指して最もよく使用されるのは哲人 (muni) であって，行者 (沙門，samaṇa) を凌いでいる。しかし muni の語はまもなく急速に廃れ，一般のニカーヤ中では沙門に圧倒されて殆ど使用されなくなった。IV 層（散文）は，このニカーヤの状況と一致するものである。

他方仏陀自身を指すと見られる善逝 (sugata)，如来 (tathāgata) の語は，時に仏陀を指す阿羅漢 (arahat)，あるいは仏弟子・信者を指す声聞 (sāvaka)・優婆塞 (upāsaka) と同様，I 層には見

[7]ただしミスプリントによって時に bhikkhave と印刷される。例えば Saṃyutta Nikāya Vol.1, p.36, l.3 など。
[8]上記 tuvam の場合も，散文中では定型句にのみ残存した。

られない。また具寿(āyasmat)，長老(thera)はI層，II層を通じて見えない。

このように，I層において教団に関わる語彙が欠如していることは，先の比丘・覚者の語の複数形不使用と符合し，II層以降，教団が急速に拡大してゆき，それに伴って教団としての慣習や規程の整備が進められたことを証していよう。

iv. 仏陀

語彙＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
sakka(śākya)	5	1*	–	–	–
sakka(śakra)	–	2*	–	–	–
sakya(śākya:pl.)	–	–	5	–	–
sākiya(śākya)	–	1	1	–	–
sakyaputta	–	–	2	3	–
sakyakula	–	–	–	1	–
sakyapuṅgava	–	–	1	–	–
sakyamuni	–	1	–	–	–
gotama-	15	15	1	65	6
mārisa (voc.)	9	–	2	–	–

先ず仏陀の部族名称「釈迦族」の形について見ると，I層では子音群同化を伴うsakka-（サンスクリット語形śākya-に対応）として現れるが，この形はII層以降には使われない。II層における唯一例345詩は，次の346詩のsakka(＝śakra帝釈天)との言葉遊びによるものである[9]。これに対しII層以降は，sakya-あるいは稀にsākiya-を用いる。

ニカーヤ全般について検証すると，sakya-が一般に用いられ，ただ，例えば「釈迦族のマハーナーマ」(mahānāmo sakko)というように人名の形容詞とする時のみ一貫してsakka-という形を用いる。古くからあったsakka-という形がśakraとの混同を招きかねないために，定型表現を除きsakya-に統一したものであろう。このようにパーリ語の綴りには，音韻的一般則を無視して人為的統一を図った面が少なくない。しかしそれも早くから聖典の権威を確立した韻文には及ばなかったため，そこに歴史的変遷を跡付け得るのである。

mārisa（「あなた様」）は，ニカーヤ全体の調査では，現れる箇所が局所的であることが注目される。『マハーバーラタ』（徳永宗雄氏データベース）においても，使用は中核部（おそらく古層）の6～9章に集中する。叙事詩にはパーリから入ったとされるため，『スッタニパータ』I層との関係が興味深いが，解明は将来に委ねられている。

v. 再生・輪廻・寂静・奈落

語彙＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
bhavābhava-	7	1	–	–	–
punabbhava-	2	9	2	–	–
uddhaṃsara-	1	–	–	–	–
jātijarā-	10	2	–	–	3
hline jātimaraṇa-	–	6	–	–	–
saṃsāra-	–	8	–	–	4
nibbāna-	9	4	–	–	12
nibbana-	1	–	–	–	2
nibbā-	1	1	–	–	–
nibbuta-	3	6	–	–	3
abhinibbuta-	3	3	–	–	–
parinibbāna-	–	1	–	–	–
parinibba(ti,ye)	–	2	–	–	1
parinibbuta-	–	8	–	5	1
niraya-	–	8	–	27	7
naraka-	–	1	–	–	–

I層には，「諸生存」(bhavābhava-)，「再生存」や「次の生存へと流れ行く人」(uddhaṃsara-)はあるが，「輪廻」や「生死」(jātimaraṇa-)はない。

「生死」はjāti-maraṇa-saṃsāra- (Sn 729.a)という表現に見えるように「輪廻」の同義語である。従って果たしてI層において「輪廻」の観念が成立していたか否かは微妙な問題であるが，「再生存」や「諸々の生存」を言う以上，それに近い考えがあったことは否めない。ブラーフマナ文献には，天界からの「再死」の観念はあっても，地上の人間への「再生」の観念は欠けており，後者はウパニシャッドに初めて現れ，そ

[9] H. Smithは，この詩については指摘しないが，656詩については地口の可能性を指摘する。Cf. Paramatthajotikā II, Vol.III. p.771, (1) Sakka, s.v.

こに「輪廻」観念が成立すると言われる。『スッタニパータ』の「諸生存」「再生存」は,「輪廻」への一歩手前か，あるいはほぼ等しい観念の別の表現であろうと推測される。

また，後に「涅槃」と音写されるnibbānaは,『スッタニパータ』中では単に平安の境地を表わしており,「死」と結び付かない。それはこの後に見る欲望の考察と関連している。また，nibbāna（寂静）はあるが，parinibbuta（完全な寂静の）は見えない。

I層に「奈落」「泥梨耶」（＝地獄）が欠けるのは，後に見る「善行」「悪行」の応報思想の発展と関係していよう。

v．濡・渇愛・随眠など

語彙＼層	I ls2	II fr3	III vtt	IV prs	Dh
āsava-:					
anāsava-	5	4	–	–	3
āsava + vid	1	–	–	–	–
āsava + kṣi	–	9	–	–	5
āsava + others	1	4	–	–	4
taṇhā-	25	17	1	2	20
(taṇhakkhaya)	3	–	–	–	1
anusaya-	–	7	–	–	1
rūpa-	18	11	–	5	3
saññā-	6	3	–	–	1
viññāṇa-	5	3	–	2	1
saṃkhāra-	–	6	–	3	3
vedanā-	1	3	–	2	1
puñña-	1	25	1	3	19
pāpa-	2	30	–	3	44
pāpaka-	–	–	–	1	5
pāpika-	–	–	–	3	4

後期ブラーフマナから初期ウパニシャッドにかけて次第に鮮明に「意向」(kratu)や「欲望」(kāma)が，人の行為を根本的に動機付け，色付けるものとして意識されるようになった。後代には「漏」と漢訳されるāsavaは，原始仏教において，そのような行為の「動機付け」を指したと考えられる。それはまた「動機」としての「渇望」(taṇhā)の類義語であった。I層においては,「（我欲的）動機付けの無い（人）」(anāsava)という言い方が好まれ,「動機付けを滅する（＝kṣi）」という表現はない。他方「渇望を滅する」(taṇha-kkhaya)は3ヶ所に見え，この表現がII層になって初出する「動機付けを滅する」という表現を誘ったように見える。

「渇望」を人の意識の根底に把捉しようとする「潜在欲望（随眠）」(anusaya)はII層以降に現れる。これは次詩に見るように,「渇望」に関する考察が一層精密となったことを反映していよう。

14. yassânusayA na santi keci
mŪlA [np] akusalA samUhatAse

「その人には，いかなる潜在欲望もなく，災いをもたらす諸々の根がすっかり抜かれている。」

また，五蘊（色，受，想，行，識）のうち,「受」と「行」はI層に殆ど見えない。

またI層では，先に述べたように，因果応報理論の一環としての善行(puñña)，悪行(pāpa)が主題となることはない。唯一の用例は次のように，それへの無関心を勧めるものである。

790. na brAhmaNo aJJato suddhim Aha
diTThe sute sIlavate mute vA
puJJe ca pApe ca anUpalitto
attaJjaho na-y-idha pakubbamAno

「バラモンは（自分自身以外の）他のものによる清めを語らない。経験，学習，戒律や誓い，想念，善，悪にとらわれることなく,（それらの）作り出してしまったものを捨て，また，いま作り出すこともないのである。」

* * *

以上のように，I層は後代に見える教理的発達を示していない場合も多い。しかし最後の790詩にも確認されるように，それは思想水準が低いことを意味しない。そこにはII層以降を凌ぐしなやかで確固とした思想があることを付言しておきたい。この点については別稿を期して論ずることとする。

(2) アヌシュトゥブ奇数行の韻律

以上のように『スッタニパータ』の4層は互いに相違を見せる。これら各層についてアヌシュトゥブ律の奇数行形式を調べると，次頁以下の表（数字は百分率）になる。当然散文層（IV層）は省く。

最初に比較のために，Śathapatha Brāhmaṇa 中のアヌシュトゥブ律の形式分布表を掲げる。第1欄のカデンスリズム (⏑–⏑⏓) の合計は，ブラーフマナから順に次第に低くなる。

Brāhmaṇa	:	14.4 %
I 層	:	13.9 %
II 層	:	2.9 %
III 層	:	0.9 %
Dhammapada	:	1.5 %

これに対し，第2欄の標準律（Pathyā: ⏑––⏓）は，次のようにブラーフマナから順に次第に高くなる。

Brāhmaṇa	:	34.4 %
I 層	:	59.1 %
II 層	:	70.0 %
III 層	:	71.7 %
Dhammapada	:	76.2 %

古典期のアヌシュトゥブの奇数行は，カデンスリズムで終わらないことが特徴で，それによって偶数行末のカデンスリズムを強調する[10]。I 層においては 13.9 %がこの形式を取り，II 層以降と際立った隔たりを見せている。

一方，標準律は一般に時代を下るにつれて増加する。やはり I 層と II 層の相違は著しい。このように，語形，語彙について見られた懸隔は，韻律においても確認される。ことに I 層と II 層の隔たりは大きく，時代の差（1世紀程度？）を推測させるであろう[11]。

*以下の表における略号は次の通りである。

cad =	cadence rhythm	P =	Pathyā
I =	Vipulā 1	II =	Vipulā 2
III =	Vipulā 3	IV =	Vipulā 4
Init.res. =	Initial resolution.		

表1　Śathapatha Brāhmaṇa: Anuṣṭubh lines = 35.

2nd hf ＼ 1st hf ＼	1(cad) ⏑–⏑⏓	2(P) ⏑––⏓	3(I) ⏑⏑⏑⏓	4(II) –⏑⏑⏓	5(III) –––⏓	6(IV) –⏑–⏓	7(V) ⏑⏑–⏓	8 ––⏑⏓	Total
m ⏓–––	8.6	8.6	–	2.9	2.9	–	–	–	23
r ⏓–⏑–	–	11.4	2.9	5.7	17.1	–	8.6	–	45.7
y ⏓⏑––	2.9	2.9	–	2.9	–	–	–	–	8.7
t ⏓––⏑	2.9	8.6	–	2.9	–	–	–	–	14.4
j ⏓⏑–⏑	–	–	–	–	2.9	–	–	–	2.9
bh ⏓–⏑⏑	–	2.9	–	–	–	–	–	–	2.9
s ⏓⏑⏑–	–	–	–	–	–	–	2.9	–	2.9
n ⏓⏑⏑⏑	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Init.res.	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Total	14.4	34.4	2.9	14.4	22.9	–	11.5	–	100.5

[10] ヴェーダのガーヤトリー律（3行詩）は奇数，偶数両行とも原則としてカデンスリズムで終わる。アヌシュトゥブはこのガーヤトリー律から派生したものである（その詳細は別稿を期す）。

[11] 本研究は，文部省科学研究費重点領域研究「人文科学とコンピュータ」応募研究「インド古典二大叙事詩の韻律」（課題番号 08207229）の研究成果の一部である。

表 2 **Suttanipāta, Vaggas IV & V:** Anuṣṭubh lines = 238.

＼ 2nd hf 1st hf ＼	1(cad) ⏑ – ⏑ ⏓	2(P) ⏑ – – ⏓	3(I) ⏑ ⏑ ⏑ ⏓	4(II) – ⏑ ⏑ ⏓	5(III) – – – ⏓	6(IV) – ⏑ – ⏓	7(V) ⏑ ⏑ – ⏓	8 – – ⏑ ⏓	Total
m ⏓ – – –	1.3	10.9	–	–	2.1	0.4	1.3	–	16
r ⏓ – ⏑ –	0.8	5.5	0.8	1.3	4.2	0.8	0.4	0.8	14.6
y ⏓ ⏑ – –	3.8	16.0	0.8	0.8	0.4	0.4	0.8	–	23
t ⏓ – – ⏑	2.5	15.1	–	–	–	–	–	–	17.6
j ⏓ ⏑ – ⏑	1.3	4.2	–	–	–	–	–	–	5.5
bh ⏓ – ⏑ ⏑	3.4	2.9	–	–	–	–	0.4	–	6.7
s ⏓ ⏑ ⏑ –	–	1.7	–	–	–	–	–	–	1.7
n ⏓ ⏑ ⏑ ⏑	–	0.8	–	–	–	–	–	–	0.8
Init.res.	0.8	2	0.8	0.8	1.6	1.7	3.7	2.1	13.5
Total	13.9	59.1	2.4	2.9	8.3	3.3	6.6	2.9	99.4

表 3 **Suttanipāta, Vaggas I ～ III:** Anuṣṭubh lines = 828.

＼ 2nd hf 1st hf ＼	1(cad) ⏑ – ⏑ ⏓	2(P) ⏑ – – ⏓	3(I) ⏑ ⏑ ⏑ ⏓	4(II) – ⏑ ⏑ ⏓	5(III) – – – ⏓	6(IV) – ⏑ – ⏓	7(V) ⏑ ⏑ – ⏓	8 – – ⏑ ⏓	Total
m ⏓ – – –	0.6	14.6	1.1	–	0.5	–	0.4	–	17.2
r ⏓ – ⏑ –	0.2	7.0	1.1	2.1	5.2	0.6	0.5	–	16.7
y ⏓ ⏑ – –	0.4	16.7	1.2	0.1	0.1	0.1	0.2	–	18.8
t ⏓ – – ⏑	0.2	10.3	–	–	–	–	0.1	–	10.6
j ⏓ ⏑ – ⏑	0.5	9.1	0.1	–	0.1	–	0.4	–	10.2
bh ⏓ – ⏑ ⏑	0.6	5.3	–	0.2	0.2	0.1	–	–	6.4
s ⏓ ⏑ ⏑ –	–	1.1	0.1	–	0.4	–	–	–	1.6
n ⏓ ⏑ ⏑ ⏑	0.1	1.2	–	–	–	–	–	–	1.3
Init.res.	0.3	4.7	0.6	1.1	3.5	0.2	2.9	3.4	16.7
Total	2.9	70	4.2	3.5	10	1	4.5	3.4	99.5

表 4 **Suttanipāta, Vaṭṭhugāthā:** Anuṣṭubh lines = 110.

＼ 2nd hf 1st hf ＼	1(cad) ⏑ – ⏑ ⏓	2(P) ⏑ – – ⏓	3(I) ⏑ ⏑ ⏑ ⏓	4(II) – ⏑ ⏑ ⏓	5(III) – – – ⏓	6(IV) – ⏑ – ⏓	7(V) ⏑ ⏑ – ⏓	8 – – ⏑ ⏓	Total
m ⏓ – – –	0.9	21.8	0.9	–	0.9	0.9	–	–	25.4
r ⏓ – ⏑ –	–	3.6	2.7	4.5	3.6	2.7	0.9	–	18
y ⏓ ⏑ – –	–	9.1	0.9	–	0.9	–	–	–	10.9
t ⏓ – – ⏑	–	8.2	–	–	–	–	0.9	–	9.1
j ⏓ ⏑ – ⏑	–	10.9	–	–	0.9	–	–	–	11.8
bh ⏓ – ⏑ ⏑	–	10.9	–	–	–	–	–	–	10.9
s ⏓ ⏑ ⏑ –	–	2.7	–	–	–	–	–	–	2.7
n ⏓ ⏑ ⏑ ⏑	–	0.9	–	–	–	–	–	–	0.9
Init.res.	–	3.6	0.9	0.9	1.8	–	0.9	1.8	9.9
Total	0.9	71.7	5.4	5.4	8.1	3.6	2.7	1.8	99.6

表5 **Dhammapada:** Anuṣṭubh lines = 724.

＼2nd hf / 1st hf＼	1(cad) ⏑–⏑⏓	2(P) ⏑––⏓	3(I) ⏑⏑⏑⏓	4(II) –⏑⏑⏓	5(III) –––⏓	6(IV) –⏑–⏓	7(V) ⏑⏑–⏓	8 ––⏑⏓	Total
m ⏓–––	0.1	13.1	0.7	0.1	1.1	0.1	0.3	–	15.5
r ⏓–⏑–	0.1	11.6	1.4	2.9	4.1	0.3	0.6	0.1	21.1
y ⏓⏑––	0.4	18.6	0.3	0.1	–	0.3	0.1	–	19.8
t ⏓––⏑	0.4	9.8	–	–	0.1	–	0.1	–	10.4
j ⏓⏑–⏑	0.3	12.4	–	–	0.3	–	–	–	13
bh ⏓–⏑⏑	–	6.8	–	–	0.3	–	–	–	7.1
s ⏓⏑⏑–	0.1	0.8	–	0.1	0.1	–	–	–	1.1
n ⏓⏑⏑⏑	–	0.1	–	–	–	–	–	–	0.1
Init.res.	0.1	3	0.7	1.2	2.9	–	1.8	1.6	11.3
Total	1.5	76.2	3.1	4.4	8.9	0.7	2.9	1.7	99.4

付録1 : **Saṃyutta Nikāya I. Sagātha-vagga:** Anuṣṭubh lines = 1348.

＼2nd hf / 1st hf＼	1(cad) ⏑–⏑⏓	2(P) ⏑––⏓	3(I) ⏑⏑⏑⏓	4(II) –⏑⏑⏓	5(III) –––⏓	6(IV) –⏑–⏓	7(V) ⏑⏑–⏓	8 ––⏑⏓	Total
m ⏓–––	0.5	12.5	0.3	0.1	1.0	0.4	1.2	–	16
r ⏓–⏑–	0.6	11.4	1.0	2.4	3.0	0.2	1.2	0.1	19.9
y ⏓⏑––	0.4	14.8	0.7	0.4	0.3	0.4	1.1	0.1	18.2
t ⏓––⏑	0.3	8.1	0.1	0.1	0.6	0.1	0.7	–	10
j ⏓⏑–⏑	0.4	10.5	–	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	11.4
bh ⏓–⏑⏑	0.2	7.0	0.2	0.2	0.4	–	0.3	0.1	8.4
s ⏓⏑⏑–	0.1	0.7	0.4	0.2	0.2	–	0.1	–	1.7
n ⏓⏑⏑⏑	–	0.7	–	–	–	0.1	–	–	0.8
Init.res.	0.5	3	0.3	0.6	3.2	0.6	2.3	2.7	13.2
Total	3	68.7	3	4.1	8.8	1.9	7	3.1	99.6

付録2 : **Thera-therīgāthā:** Anuṣṭubh lines = 2644.

＼2nd hf / 1st hf＼	1(cad) ⏑–⏑⏓	2(P) ⏑––⏓	3(I) ⏑⏑⏑⏓	4(II) –⏑⏑⏓	5(III) –––⏓	6(IV) –⏑–⏓	7(V) ⏑⏑–⏓	8 ––⏑⏓	Total
m ⏓–––	0.3	18.2	0.9	0.5	0.9	0.1	0.5	0.1	21.5
r ⏓–⏑–	0.3	9.4	1.4	3.0	4.2	0.3	0.3	0.3	19.2
y ⏓⏑––	0.2	15.5	1.1	0.5	0.5	0.2	0.6	0.1	18.7
t ⏓––⏑	0.1	9.9	0.0	0.1	0.3	0.0	0.2	–	10.6
j ⏓⏑–⏑	0.2	9.0	0.1	0.1	0.2	0.0	0.3	–	9.9
bh ⏓–⏑⏑	0.1	5.3	–	0.1	0.5	0.1	0.1	0.0	6.2
s ⏓⏑⏑–	0.1	0.8	0.1	0.2	0.3	–	0.1	–	1.6
n ⏓⏑⏑⏑	–	0.9	–	0.0	0.0	–	–	–	0.9
Init.res.	0.1	2.9	0.2	1.3	2.5	0.4	2.6	1.2	11.2
Total	1.4	71.9	3.8	5.8	9.4	1.1	4.7	1.7	99.8

表6　『スッタニパータ』平行詩節対応表（詩節全体が一致する詩節数）

(1)Uraga-vagga	verses	Nikāya	Dh;Th	N-Pali	阿含
1. uraga	1- 17			21	
2. dhaniya	18- 34	2			2
3. khagga	35- 75	2	3	5	2
4. kasibhrdvāja	76- 82	7			7
5. cunda	83- 90				8
6. parābhava	91- 115		1		10
7. vasala	116- 142	1			26
8. metta	143- 152	1	1		
9. hemavata	153- 180	5			22
10. ālavaka	181- 192	13		3	9
11. vijaya	193- 206		1		
12. munisutta	207- 221				2

(2)Cūla-vagga	verses	Nikāya	Dh;Th	N-Pali	阿含
13. ratana	222- 238				
14. āmagandha	239- 252				
15. hiri	253- 257		1	1	5
16. mahāmaṅgala	258- 269				
17. sūciloma	270- 272	4			3
18. dhmmacariya	274- 283	3			3
19. brhmdhmm	284- 315				30
20. nāvā	316- 323			3	
21. kiṃsīla	324- 330				1
22. uṭṭhāna	331- 334	1	1	2	1
23. rāhula	335- 342	1	3		6
24. vaṅgīsa	343- 358		16		13
25. smmprbbājny	359- 375				
26. dhammika	376- 404	2			3

(3)Mahā-vagga	verses	Nikāya	Dh;Th	N-Pali	阿含
27. pabbajjā	405- 424	3			
28. padhāna	425- 449	3			3
29. subhāsita	450- 454	5	4	5	5
30. sundrkbhrvj	455- 486	4			4
31. māgha	487- 509				8
32. sabhiya	510- 547	1	2		3
33. sela	548- 573	26	24		11
34. salla	574- 593	1		4	1
35. vāseṭṭha	594- 656	58	29	45	1
36. kokāliya	657- 678	9	2	13	13
37. nālaka	679- 723 (679~678)				
38. dvytānpssnā	724- 765	15	2	3	13

(4)Aṭṭhaka-vagga	verses	Nikāya	Dh;Th	N-Pali	阿含
39. kāma	766- 771		1	1	
40. guhaṭṭhaka	772- 779				
41. duṭṭhaṭṭhak	780- 787				
42. suddhaṭṭhak	788- 795				
43. paramaṭṭhak	796- 803				
44. jarā	804- 813				
45. tissamettyy	814- 823				
46. pasūra	824- 835				
47. māgandiya	835- 847	2(1*)	1		2(1*)
48. purābheda	848- 861				
49. kalahavivād	862- 877				
50. cūḷaviyūha	878- 894				
51. mahāviyūha	895- 914				
52. tuvaṭaka	915- 934				
53. attadaṇḍa	935- 954				
54. sāriputta	955- 975			2	

(5)Pārāyana-vagga	verses	Nikāya	Dh;Th	N-Pali	阿含
55. vatthugāthā	976-1031	[4]			
56. ajitamṇvp	1032- 39	1*			1*
57. tssmttymṇvp	1040- 42	2*			2*
58. puṇṇakamṇvp	1043- 48	2*			2*
59. mettagūmṇvp	1049- 60				
60. dhotakamṇvp	1061- 68				
61. upasīvamṇvp	1069- 76				
62. nandamṇvp	1077- 83				
63. hemakamṇvp	1084- 87				
64. todeyyamṇvp	1088- 91				
65. kappamṇvp	1092- 95				
66. jatukaṇṇīmp	1096- 100				
67. bhdrāvudhmp	1101- 04				
68. udayamṇvp	1105- 11	4(2*)			4(2*)
69. posālamṇvp	1112- 15				
70. mogharājamp	1116- 19				
71. piṅgiyamṇvp	1120- 23				
72. pratīka	1124- 49				

略号説明

Nikāya : SN, DN, MN, AN.

Dh;Th : Dhammapada, Therathērī-gāthā.

N-Pali : Udānavarga, Gāndhārī-dhp, Patna Dhammapada.

阿含 : 長阿含, 中阿含, 雑阿含, 増一阿含

第 35 回 ICANAS パネル「日本人の目を通して見た中国宗教」に参加して

森由利亜（早稲田大）

ハンガリーの首都ブダペストの中心を流れるドナウ川東岸に建つ、ブダペスト経済大学を中心会場に、第35回の ICANAS（国際アジア・北アフリカ研究会議）が、1997年7月7日より12日に至る6日間の日程で開催された。参加者名簿によると900人近い登録者があった。前々回・前回の大会に引き続き、やはり驚くべきは発表数の多さで、複数のシンポジウムに組み込まれた発表をも合わせるとほぼ900本が予定されており、参加者全員が少なくとも一本の発表を担当している勘定になる。部会構成は 20 から成り、古代近東部会、ユダヤ・ヘブライ学部会、イスラム学部会、アラビア学部会、イラン学部会、オスマン・トルコ学部会、コーカサス部会、チュルク学部会、モンゴル学部会、蒙古・ツングース学部会、チベット学部会、サンスクリット部会、インド・ヒンズー学部会、タミル・ドラヴィダ学部会、仏教学部会、東南アジア学部会、日本学部会、中国学部会、韓国朝鮮学部会、近現代史学部会があった。また、部会外のシンポジウムとして登録されているのは、「敦煌とトルファン」(7~8 日)、ロシアの学者による「東洋諸学」(8 日)、「東洋図書館学」(8 日)、「20 世紀終わりのオスマン・トルコ学」(9日)、「コンピューターと東洋学」（9日）であるが、各部会内部においても実質はシムポジウムと変わらない企画がいくつかあった。ここで紹介するパネル「日本人の目を通して見た中国宗教—日本人研究者の現状と動向—」(*Chinese Religion trough Japanese Eyes: The current Tendency of Development of Japanese Research on Chinese Religion.*) はその中のひとつである。

本パネルは福井文雅氏（早稲田大）を司会として、芦田孝昭（「日本人の中国詞解釈と汎神論」早稲田大）・菊池章太（「中国仏教の疑経」豊田短大）・デレアヌ フロリン（「近世（宋～清朝）の中国仏教に関する日本の研究」関西医科大）・田中文雄（「日本人研究者の中国仏教儀礼研究」大正大）・山田利明（「日本人研究者の中国道教研究」東洋大）・丸山宏（「日本における道教儀礼研究上の諸問題」東北大）の諸氏および筆者を発表者とし、浅野春二（「丸山氏への対論」國學院短大）・土屋昌明（「日本の神道家の道家・道教研究」富士フェニックス短大）・馬渕昌也（「日本の中国宗教研究と儒教研究」専修大）・前田繁樹（「道教研究の現状と問題」皇學館大）・三田村圭子（「中国文学と道教に関する日本の研究の問題点」桜美林大）の諸氏を対論者に迎えるという構成を採る。以下に本パネルの発表内容を簡略に紹介する。

福井氏は、その序言の中で、まず本パネルの主旨紹介をされ、つづいて自らの中国宗教研究の視点を明らかにされた。仏教・道教・儒教三教の展開を軸とする中国の宗教史の流れが、15 世紀を境としていかに大きく変化したかについて、三教それぞれについて指摘された。就中仏教の変質については、明代以降において中国仏教と日本仏教との間のズレが多方面で顕著となってゆくさまを、論議や香賛といった儀礼上の要素の変化や出現、観音信仰のような一見普遍的に見える信仰における差異、また近代に於ける権田雷斧の中国伝道の意味するもの等に具体的に触れながら論及された。いわば日本仏教を鏡にしながら中国仏教の変遷を確認するという、日本の研究者の視点を生かした方法論・視点の提示がなされたといえよう。

次に芦田氏は、配布されたレジュメを通じて「文気」という中国の文体論上の用語と、「文脈」というむしろ中国では稀とされる用語の性格上の差異に注目された。前者が文章を作る経験に根ざした、文字の上に実体化され得ない感覚的な用法に依存し、批評用語としては不向きなのに対して、後者は文字の上に顕在化した単位に基づくもので批評用語としての利便性を獲得している。この違いは和歌と詞の句法上の差異にもあらわれており、和歌における余韻（欠如の感覚）が連用

形終止法や助詞によって明示的に示されるのに対し、漢文の詞では上・下片の矛盾は読後に得られる総合的な統一感覚によって結果的に補完されるという。ここに、氏の分析は単に文体上の問題のみならず、それが表現する世界観の問題へと発展する契機を孕むことになるのである。

菊池氏は、日本と欧米の過去の疑経研究史を対照され、日本においては、教義研究を重視する傾向から、中国撰述経典研究がややもすれば周辺的・補助的研究として位置づけがちであることに批判的に言及された。他方欧米の研究では、道教経典の研究成果を積極的に踏まえつつ、その経典を生み出した時代性に着目する傾向があり、むしろこの方法の延長上で解決されるべき課題が豊富であろうと問題を提起された。更に、欧米と日本では、採り上げる中国撰述経典の偏りに違いがあり、そこにはやはり両者の仏教観・宗教学的手法の差異が反映されていると指摘された。

デレアヌ氏は、戦後の近世（宋～清）仏教研究が、戦前の研究に比してともすれば低調な印象を人に与えがちであることの理由を述べて擁護し、この分野の主たる研究成果を文献学的・社会経済史的・教学的の三つの方法論上の領域に区分して紹介された。そのうえで、氏は現在の日本の近世仏教研究に関して留意されるべき特徴を三点抽出した。第一に、しばしば誤解されるように、日本の仏教研究すべてが必ずしも厳格な実証主義をのみ旨としているわけではないこと、第二に日本の研究の多くに宗門・より広くは仏教者としての立場が反映される傾向がある（それを氏は決して否定的に捉えてはいない）が、日本仏教との直接的関係が稀薄な近世仏教研究においては仏教者的な立場は反映されにくい点を指摘された。最後に、同時代の宗派相互の関係に注目する観点がより多くの研究者によって共有されつつあることを述べられた。

田中氏は、日本における中国仏教儀礼研究が、主として経典研究の問題意識の枠内で成立してきたものであり、その利点は充分認めねばならないとしつつも、総合的な儀礼研究、また現地調査を踏まえた儀礼実践研究へとは結実し難い事情を明らかにされた。特に欧米の研究と比較した場合、日本の研究は仏教的要素とその他の要素との弁別を重視する。このような日本的関心は、儀礼構造を（自己が所属する文化の外部にあるものとして）総合的に把握する欧米流の関心とは別の、仏教文化を自国の文化要素としてとりわけ重視しようとするものであることを指摘された。

山田氏は、西欧の道教研究の特徴として、道家（老・荘・玄学）思想と道教を一体と見ること、および民間信仰と道教を明確に区別することの二点を挙げ、これらの観点が含む問題に言及された。第一の観点については、道家と道教という用語上の区別が時として困難を伴うものであることを認めた上で、それでもなお両者を弁別する視点が必要とされること、また現に欧米の研究の中でも（特に玄学研究においては）実質的には両者を分けている場合のあることを指摘された。ただし、両者は道家の哲学的側面と実践的側面として区別されるべきであることを同時に補足された。第二の観点については、道蔵中に見られる教を道教とすることの曖昧さを指摘された。また、かつての中国社会においては正統と異端の弁別の枠組が皇帝・官僚を中核とする世俗的な配慮に基づくことに言及し、中国宗教研究者がこれをキリスト教的な正統・異端の枠組みと混同して議論することの危険を強調された。最後に、道教をめぐる、信仰の実体から遊離した恣意的な区分法の無効性に言及された。

森（筆者）は、1940 年代から 70 年代に至る日本の近世道教研究が、浄明・全真・太一・真大道諸教を「新道教」という名称のもとに包括し、この名辞に道教の改革や大衆化という道教史観を反映させてきた点に注目した。このような道教史観においては、善書作成ま

でもが道教の延長にあると見なされ、道教の概念は広義に定められる傾向にある。西欧の代表的研究では、道教と民間信仰とを原則上峻別し、道教の秘儀的側面の不変を強調し、また道教は大衆化されないという議論が顕著だが、上述の視点はこれとは好対照をなす。最後に、80 年代以降の研究が、「新道教」という枠組みよりも個々の事象の検討を優先させている事情に触れた。

丸山氏は、日欧の研究傾向を、大淵忍爾と K. M. Schipper の研究を比較することで対照的に描き出された。その中で氏は、両者を支えた（経歴や現地調査時の使用言語をも包括する）客観的諸条件を対比し、また両者に於ける道教儀礼の本質の把握の仕方の違いを検討し、その結果抽出された諸々の差異を、概ね次の点へと収斂させた。すなわち、大淵が道教の諸要素を社会的な大衆運動に包括させる史学者的観点に立ち、道教儀礼独自の要素や成仙など、いわば道士としてのエリート的な資格に関わる事項を（儀礼に関しては）ほとんど問題としない。これに対し、自らが道士でもある Schipper は、道教内部の視点に立ち、儀礼を実践する道士の資格や身体、身体の内的過程等を道教の中心に据え、一般大衆と共有し得ない部分を重視するのである。なお、結論部で、氏は 90 年代以降の日本の道教および道教儀礼研究の動向に言及された。

次に、五名の対論者の見解を簡略に記す。まず、前田氏は、日本の伝統的、かつなかば信仰に支配された注釈的研究態度（それは大陸から受容した仏教や儒教の典籍解釈には必須の姿勢であったはずである）が、道教研究にも反映してはいまいかとの指摘をされた。また馬淵氏は、儒教の宗教性（儒教儀礼）に関する研究は社会史方面から最近盛んに行われるようになったとはいえ、それが従来蓄積された儒教思想研究の成果とかみ合い、仏教・道教・民間信仰の儀礼研究と歩調を合するまでには至っておらず、重要な課題となっていることを指摘された。土屋氏は、江戸時代の国学の伝統において、国学者が儒教を批判するための有効な思想表現として、老荘思想を利用してきた点に言及する。その際に氏は、道家の自然の思想が「道家」「道教」という用語ではなく、「玄」字により代表されてきたことに触れられた。三田村氏は、日本の道教研究の成果が文学研究をはじめとする日本の他の中国研究に充分反映していない状況を指摘された。その原因の一つとして、日本の研究者が道教経典の翻訳にあまり携わってこなかったことを挙げられた。浅野氏は、劉枝萬の例（劉は、道教儀礼を台湾および華人の民俗に還元可能なものと考える）を挙げて丸山氏の観点を補足された。（以上、報告対象として言及された学者の敬称は省略。）

以上が本パネルのおおよその発表内容である。総体的な印象としては、「日本の研究」・「海外の研究」という区分は歴史的条件に規定されて成立している面が強く、世界レベルでの交流が日常化すれば互いに容易に影響し合って、やがて明確な線引きが難しくなるであろうという感覚を得た。しかし、現地調査の条件の整備など、制度に関わる問題は単なる情報交換レベルでは如何ともし難く、願わくは「日本の研究」や「日本の研究者の意識」が負の要因によって個性化されないことである。なお、会場では福井・山田・田中・菊池三氏共編による最近 10 年間の日本における仏教・道教研究の目録を配布した。他のパネルが、往々にしてレジュメを欠いたり、大幅な予定変更や発表者の欠席のため混乱していたのに比して、本パネルが整然と進行したのは、総合司会の福井先生のご尽力はもとより、準備企画段階で田中先生・山田先生が中心になり並々ならぬ周到なご準備を進めて来られたからであったと確信している。

1997－1998　コレージュ・ド・フランス開講講座（東洋学関係）

Langues et Religions Indo-Iraniennes

Jean Kellens "De la naissance des montagnes à la fin du temps : le Yast 19", les vendredis, à 9h30, Lieu des Cours. (Ouverture le 10 octobre.)

Séminaire : "Lecture du Yast 19", les vendredis, à 11h, Lieu des Séminaires. (Ouverture le 10 octobre.)

Histoire du Monde Indien

Gérard Fussman "Kaniska et la chronologie de l'Inde ancienne", les jeudis, à 18h, Lieu des Cours. (Ouverture le 2 octobre.)

Séminaire : "Explication de documents relatifs au sujet du cours ", les vendredis, à 15h, Lieu des Séminaires. (Ouverture le 3 octobre.)

Histoire de la Chine Moderne

Pierre-Étienne Will (Le cours n'aura pas lieu).

Histoire Économique et Monétaire de l'Orient Hellénistique

Georges Le Rider "Après Alexandre : un essai d'économie contrôlée dans l'Égypte des Lagides ", les mercredis, à 17h. Lieu des Cours. (Ouverture le 7 janvier.)

Séminaire : "En relation avec le sujet du cours ", les mercredis, à 18h, Lieu des Séminaires. (Ouverture le 7 janvier.)

Histoire et Civilisation du Monde Byzantin

Gilbert Dagron

1er *Séminaire :* Travaux en vue d'une édition commentée du "Livre des Cérémonies".
2e *Séminaire :* L'Hippodrome de Constantinople, histoire sociale (suite)
Les deux séminaires auront lieu les jeudis, à 11h, Lieu des Séminaires. (Ouverture le 4 décembre.)

BOUDDHISME D'ASIE DU SUD-EST

Directeur d'études : **M. François BIZOT**

Theravada :

- 1. L'origine des communautés bouddhiques du Nord de la péninsule indochinoise.
- 2. Les rites obligatoires de la vie ordinaire : description et symbolisme, les jeudis de 18 h. à 20 h.

RELIGIONS DE L'ASIE SEPTENTRIONALE

Directeur d'études : **Mme Roberte HAMAYON**

- 1. Contacts entre chamanismes et religions universalistes, à partir d'exemples du christianisme orthodoxe et du bouddhisme lamaïque en Sibérie (suite), les jeudis de 10 h. à 12 h.
- 2. Initiation aux chamanismes sibériens (1er semestre) et Travaux dirigés sur les thèmes du séminaire (2è semestre), les jeudis de 9 h. à 10 h.

RELIGIONS TIBÉTAINES

Directeur d'études : **Mme Anne-Marie BLONDEAU**

- 1. Choisir sa réincarnation : lignées de réincarnation (yang srid) et transfert de conscience ('pho bap).
- 2. Etudes bon po : rituels et doctrines, les jeudis de 11 h. à 13 h.

Cf. aussi infra : conférences d'introduction, les jeudis de 10 h. à 11 h.

Chargé de conférences : **M. Stéphane ARGUILLÈRE**

Introduction à la lecture des textes philosophiques en langue tibétaine :
le traité De la distinction des vues (lTa-ba'i shan 'byed) de Go-rams-pa bsod nams seng ge (1429-1490) (1er semestre)
le commentaire de 'Ju Mipham (1846-1912) au Dharmadharmatavibhaga (2è semestre)
les mercredis de 17 h. à 19 h. tous les quinze jours.

Directeur d'études invité : **M. Franc-Karl ERHARD**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE LA CHINE

Directeur d'études : **M. Kristofer SCHIPPER**

- 1. Les temples de Pékin à travers leur épigraphie.
- 2. Le Zhengyi fawen, canon de l'église du Maître céleste, les samedis de 10 h. à 12 h.
- 3. Travaux du programme de recherche «Pékin Ville Sainte», les samedis de 12 h. à 13 h.

Chargé de conférences : **M. Franciscus VERELLEN**
Recherches sur l'histoire du taoïsme, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

SYSTÈMES DE CROYANCE ET DE PENSÉE DU MONDE SINISÉ

Directeur d'études : **M. Marc KALINOWSKI**
Devins et philosophes à la fin des Royaumes combattants et au début des Han. Lecture contextualisée du Grand commentaire (Xici) du Livre des mutations, les vendredis de 14 h. à 16 h.

Directeur d'études invités : **M. Wenkuan DENG**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS ET TRADITIONS POPULAIRES DU JAPON

Directeur d'études : **M. Hartmut O. ROTERMUND**

- 1. L'image des Occidentaux dans le Japon du XIXè siècle (Religion et politique à l'ère Meiji III), les vendredis de 16 h. à 17 h. 30.
- 2. Recherches sur l'histoire de la prédication, les vendredis de 17 h. 30 à 18 h. 30.
- 3. Travaux pratiques : lecture de textes sur manuscrit, les vendredis de 18 h. 30 à 19 h. 30.

Chargé de conférences : **M. Jean-Pierre BERTHON**

La religion dans le Japon d'aujourd'hui : diversité des formes et des pratiques, les jours et heures seront précisés ultérieurement.

Directeur d'études invité : **M. Ari VAN DER KOOJI**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

Directeur d'études invité : **M. Herbert E. PLUTSCHOW**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

Directeur d'études invité : **M. Kaoru USHIROSHÔJI**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

BOUDDHISME JAPONAIS

Directeur d'études : **M. Jean-Noël ROBERT**

Le Commentaire du Traité du Lotus d'Enchin (connaissance du chinois classique ou du sino-japonais indispensable), les mercredis de 18 h. à 20 h.

Cf. aussi infra : Conférences d'introduction, les mardis de 18 h. à 20 h.

RELIGIONS DE L'INDE

Directeur d'études : **M. Charles MALAMOUD**

- 1. Étymologie et religion d'après les textes de l'Inde védique et brahmanique, les mardis de 14 h. à 16 h.
- 2. Lecture du Satapatha-Brahmana, les mercredis de 10 h. à 12 h. (au C.E.I.A.S., 54 Bd Raspail, 75006 Paris).

Chargée de conférences : **Mme Lyne BANSAT-BOUDON**

Le rite, le théâtre et l'ordre du monde : lectures du Natyasastra, les 2è et 4è mercredis de chaque mois de 14 h. à 16h.

Directeur d'études : **Mme Marie-Louise REINICHE**

- 1. Les relations du religieux et du politique et leurs évolutions dans le monde indien : problèmes anthropologiques et perspective omparative (suite), les jeudis de 16 h. à 18 h.
- 2. Ethnologie et sociologie de l'hindouisme, jour et horaire à fixer.

Directeur d'études invité : **M. Stanley TAMBIAH**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE L'INDE : VÉDISME ET HINDOUISME CLASSIQUE

Directeur d'études : **NN**

RELIGION DE L'ÉGYPTE ANCIENNE

Directeur d'études : **Mme Christiane ZIVIE-COCHE**

- 1. La pensée cosmogonique : notions conceptuelles et récits mythologiques (suite).
- 2. Lectures ptolémaïques : autobiographie de particuliers d'après des statues de l'époque ptolémaïque, les mercredis de 12 h. à 14 h.

La 3è heure se fera sous forme de séminaires dont les horaires seront précisés ultérieurement.

Directeur d'études invité : **M. Alexandro ROCCATI**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

RELIGIONS DE L'IRAN ANCIEN

Directeur d'études : **M. Philippe GIGNOUX**

- 1. Analyse d'ouvrages récents sur le zoroastrisme.
- 2. Explication du Dâdestân î Mênôg î xrad (fin), les mardis de 9 h. à 12 h.

Chargé de conférences : **M. Frantz GRENET**

- 1. Etude de documents d'archives sogdiens : les Anciennes Lettres (début IVè siècle de notre ère).
- 2. Documents sur le zoroastrisme est-iranien : textes, documents archéologiques, documents iconographiques, les jeudis de 15 h. à 17 h.

RELIGIONS DU PROCHE ORIENT SÉMITIQUE ANCIEN

Directeur d'études : **Mme Hedwige ROUILLARD-BONRAISIN**

- 1. Annales, histoire et historiographie (suite).
- 2. Etude du livre de Daniel (suite), les mardis de 13 h. à 15 h.

Directeur d'études invités : **M. Karel Van den TOORN**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

THÉOLOGIE MUSULMANE

Directeur d'études : **M. Daniel GIMARET**
Lecture de textes, les mercredis de 9 h. à 10 h.

HISTOIRE DES PHILOSOPHIES EN ISLAM

Directeur d'études : **M. Pierre LORY**

Le rêve comme voie de connaissance dans la pensée musulmane médiévale, les mercredis de 9 h. 30 à 11 h. 30 [les cours ont lieu 12 place du Panthéon, deuxième étage, dans la Salle du Droit musulman].
Cf. aussi infra : Conférences d'introduction, les mercredis de 11 h. 30 à 12 h. 30.

Chargé de conférences : **M. Abdellah BOUNFOUR**

L'exégèse coranique : penser la genèse (suite), les mardis de 17 h. à 18 h. [les cours ont lieu 12 place du Panthéon, deuxième étage, dans la Salle du Droit musulman].

Directeur d'études invité : **M. Jean MICHOT**

Aspects de la philosophie d'Ibn Sînâ (Avicenne), les mardis 3, 10, 17 février et 17 mars de 9 h. 30 à 11 h. 30. [les cours ont lieu 12 place du Panthéon, deuxième étage, dans la Salle du Droit musulman].

ANTHROPOLOGIE RELIGIEUSE DU MONDE MUSULMAN

Maître de conférences : **Mme Denise AIGLE**

- 1. Les saints hommes du Fars médiéval : itinéraires personnels et place dans la société, les 1er, 2è et 3è lundis de 13 h. à 15 h.
- 2. Le miracle en islam (lecture commentée de traités hagiologiques), les 4è lundis de 13 h. à 15 h.

Cf. aussi infra : Conférences d'introduction, les jeudis de 13 h. à 14 h.

Chargé de conférences : **M. Mohamad LACHHAB**

ARCHÉOLOGIE RELIGIEUSE DU MONDE BYZANTIN

Directeur d'études : **M. Claude LEPAGE**

- 1. Méthodologie à la recherche de l'écriture scientifique, les samedis de 9 h. à 10 h.
- 2. Couleur et art byzantin : état de la question et perspectives offertes par les nouvelles technologies informatiques (suite), les samedis de 10 h. à 11 h.
- 3. Art et iconographie des anciens manuscrits éthiopiens illustrés (du XIè (?) au XVè siècle) : questions sans réponse, les samedis de 11 h. à 12 h. (trois samedis seront consacrés à des stages d'informatique appliquée aux études byzantines et iconographiques).

Cf. aussi infra : Conférences d'introduction, cours: INFORMATIQUE APPLIQUÉE AUX SCIENCES RELIGIEUSES.

Chargée de conférences : **Mme Nicole THIERRY**

Du paganisme au christianisme dans la régiond e Görem (Cappadoce). Géographie historique des sites, les 2è samedis, de 9 h. 30 à 12 h.

Directeur d'études invité : **M. Athanasios SEMOGLOU**
Les sujets, jours et heures seront précisés ultérieurement.

CHRISTIANISME BYZANTIN

Directeur d'études : **M. Bernard FLUSIN**

- 1. Croix et reliques à Constantinople au Xème siècle (suite).
- 2. Questions d'hagiographie palestinienne (suite), les vendredis de 16 h. à 18 h.

Chargée de conférences : **Mme Marie-Hélène CONGOURDEAU**
Questions d'anthropologie aux VIè et VIIè siècles: l'homme, son âme et son corps), les vendredis de 18 h. à 19 h. 30 tous les quinze jours.

新刊紹介

ポール・ペリオ著、アントニノ・フォルテ校訂・補遺「西安府の景教碑文研究」
Paul PELLIOT, *L'inscription nestorienne de Si-ngan-fou*, Edited with Supplements by Antonino FORTE, Scuola di Studi sull'Asia Orientale, Kyōto/ Collège de France, Institut des Hautes Études Chinoises, Paris (Éditions De Boccard), 1996, xxi-540p., IX pl.

中国におけるキリスト教布教の最も早い足跡のひとつである唐の建中二年（781）の「大秦景教流行中国碑」に関しては、ヨーロッパにおいて厖大な研究の蓄積がある。今世紀を代表する東洋学者の一人ポール・ペリオもまた、この問題に取り組み、他の多くの主題と同様に、未完の手稿を残して世を去った。ペリオは生前ある事情から、その注記のごく一部を公表したことがあり（"Une phrase obscure de l'inscription de Si-ngan-fou", *T'oung pao*, XXVIII, 1931, pp.369-378)、碑文の翻訳のみは、1984年にジャン・ドヴィリエ神父の校訂で刊行された（Œuvres posthumes de Paul Pelliot, Jean DAUVILLIER éd., *Recherches sur les chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient*, t.II/1, "La stèle de Si-ngan-fou", Éditions de la Fondation Singer-Polignac, Paris 1984, pp.43-49)。しかし、これは今回明らかにされたとおり、かなり訂正を要する箇所が少なくなかった。この1984年の出版においては、ペリオ自身の文章はわずかに数ページのみで、景教碑文の紹介はペリオの遺稿をもとにドヴィリエ神父がまとめたものである。それを序論としたうえで遺稿全体の出版も企てられたというが、ついに果たされなかった。ペリオの没後半世紀を経てようやくそれが実現されたのである。

今回校訂出版された景教碑文に関するペリオの遺稿（Musée Guimet, ms. Pelliot 210）は、その内容において二つに分けられ、明末における碑文の再発見とその後の歴史についての考証、ならびに碑文の翻訳と注釈からなる。碑文の翻訳は1914年に企てられ、その注釈は1920年までに完成した。さらに歴史に関する記述は、それに続いて執筆されたという。これだけで本書の300ページを超える分量であるが、しかしそれとても景教碑文に関する大部な研究計画の一部でしかなかった（その計画のあらましは、フォルテ氏によって推定され、後述のように、そのいくつかは本書の補遺においてフォルテ氏自身によって考究された)。以上の景教研究は、中央アジア以東におけるキリスト教史の解明という、さらに遠大な計画へと発展する予定であったという（その中には既に完成された部分もある。Œuvres posthumes de Paul Pelliot, Jean DAUVILLIER éd., *Recherches sur les chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient*, t.I, 1. "En marge de Jean du Plan Carpin", 2. "Guillaume de Rubrouck", 3. "Màr Ya(h)b^{h}allàhâ, Rabban Ṣàumâ et les princes Öngüt chrétiens", Imprimerie Nationale, Paris 1973, iv-307p.)。

本書はペリオによる景教碑文の研究ならびにフォルテ氏による補遺から構成される。ペリオの研究は、上述のとおり二部に分かれ、第一部「景教碑文序説」では、碑文の発見から始まり、その後の沿革が詳細に論じられる。そこでは、碑拓や写真複製あるいは諸国語への翻訳などにより碑文がどのように紹介されたかが丹念にたどられ、さらに真偽論争をも含めた研究史が概観される。続く第二部「翻訳と注解」では、西安碑林における現状の記述から始まって、漢文ならびにシリア語銘文の翻訳とその注釈が綿密に展開される。さらにペリオの手稿における欄外の書き込みも翻刻され、手稿そのものについての従来の校訂

との異同が示される。

本書の後半には、フォルテ氏による四編の論文が掲載され、ペリオの研究を補完している。そこでは、碑文中の貞観十二年（638）景教認可の詔についての唐会要本との齟齬とその復原、「大秦国大德阿羅本」なる人物の実名と出自に関するペリオ説への疑義、さらに長安の崇福寺における仏教僧と景教徒との交渉などが明らかにされ、最後に碑文の翻刻がなされる。以下に本書の目次を示す。

Foreward/ avant-propos; Avertissement, p.vii-xxi.

L'inscription nestorienne de Si-ngan-fou (Paul PELLIOT), pp.1-324.

avertissement (Antonino FORTE), p.2.

Préliminaires (Paul PELLIOT), pp.3-166.

ch.I, La découverte de la stèle, pp.5-57.

ch.II, Histoire de la stèle après le découverte, estampages, répliques, etc., pp.59-94.

ch.III, Les traductions, pp.95-146.

appendice, Les débats sur l'authenticité.

Traduction du texte chinois de la stèle et commentaire (Paul PELLIOT), pp.167-309.

description de la stèle, pp.169-170.

table synoptique, p.171.

traduction, pp.173-180.

commentaire, pp.181-309.

notes en marge (Antonino FORTE), pp.311-324.

notes editoriales, pp.325-346.

Supplements (Antonino FORTE), pp.347-495.

The Edict of 638 allowing the Diffusion of Christianity in China, pp.349-373.

On the So-called Abraham from Persia. A Case of Mistaken Identity, pp.375-428.

Appendix A, On the Original Name of Aluohan.

Appendix B, Mainland China's Recent Interest in the Axis of the Sky.

The Chongfu-si in Chang'an. A Neglected Buddhist Monastery and Nestorianism, pp.429-472.

Appendix, The Chongfu Monastery in Chang'an. Foundation and Name Changes.

A Literary Model for Adam. The Dhūta Monastery Inscription, pp.473-587.

Additional Remarks, pp.489-495.

The Chinese Inscriptions on the Stele of 781, pp.497-503

Index of Proper Names and Titles, pp.505-539.

List of Illustrations, p.540.

校訂者のフォルテ氏はヨーロッパを代表する中国仏教史学者の一人として知られ、現在は京都のイタリア文化会館の館長を勤めておられる。著書には、敦煌写本『大雲経疏』の分析をもとに武周革命の全貌の解明に寄与した名著 *Political Propaganda and Ideology in China at the End of the Seventh Century* (Istituto Universitario Orientale, Napoli 1976)、則天武后による洛陽の天堂建設をめぐる政治史・宗教史・科学史的背景を縦横に論じた *Mingtang and Buddhist Utopias in the History of the Astronomical Clock* (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma/ École Française d'Extrême-Orient, Paris 1988)、後漢の時代に中国に至り多くの訳経を残した安世高とその子孫の活動を明らかにした *The Hostage An Shigao and his Offspring: An Iranian Family in China* (Scuola di Studi sull'Asia Orientale, Kyōto 1995) などがある。近年は牧田諦亮氏を中心とする七寺の古逸経典の調査に参加され、落合俊典氏との共編で、その成果の一部をいち早く英文の書物として出版され、敦煌写本の発見にも匹敵するその重要性を世界の仏教学界に報告された（OCHIAI Toshinori, Antonino FORTE et al., *The Manuscripts of Nanatsu-dera*, Scuola di Studi sull'Asia Orientale, Kyōto 1991)。中国仏教史以外にも韓国仏教やマニ教、景教に関する研究も多く発表されている。

ミシェル・ストリクマン「真言と高官 — 中国密教研究論集」
Michel STRICKMANN, *Mantras et mandarins: Le bouddhisme tantrique en Chine*, Paris (Éditions Gallimard) 1996, 557p, XXXI pl.

1994年に物故された中国宗教史学者ミシェル・ストリクマンは、映画の『いちご白書』に出てきそうな風貌の持ち主であったという。1942年に合衆国に生まれ、1962年から1972年までライデンおよびパリ大学に学び、上清派道教の研究で学位を得られた（*Le taoïsme de Mao chan: chronique d'une révélation*, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, XVII, Paris 1981)。その後、1977年の暮れまで京都に滞在され、1978年にはカリフォルニア大学バークレー校に迎えられた。1983年以降はベルリンの高等学術研究院やパリ大学高等研究院に在籍され、ボルドー大学の中国学講座の教授となって間もなく他界された。

中国密教に関連する諸問題を論じた本書の構想は、京都留学時代に溯り、比叡山において天台宗の法会に参じ、インド仏教が中国を経て変容しつつも、生きた形で日本に伝承されているという認識を得たことに始まるという。その際に、多くの文献資料と写真資料をも入手され、バークレーに移ってからその研究を継続された。たとえば「神呪と終末論」と題された本書の第一章は、五世紀に中国で編纂された『灌頂経』を対象としており、その最初の原稿は、京都滞在中にまとめられ、一部分は既に英語の論文として刊行されている（"The *Consecration Sūtra*: A Buddhist Book of Spells", Robert BUSWELL Jr. ed., *Chinese Buddhist Apocrypha*, University of Hawaii Press, Honolulu 1990, pp.75-118)。実に20年以上の年月をかけて追及されたテーマであった。

なぜ『灌頂経』が研究対象として選ばれたのか。ストリクマンは、これが中国撰述の疑経であること（彼は疑経を中国宗教史の中で最高度に重要な資料であり、仏教研究全般においてもとりわけ考察に値するものであることを力説する)、同時代の道教文献とも密接な類似を示していること、また、この経典を始めとする陀羅尼経典が、僧侶のみならず俗人にも受容され、かつ流通し得たものであることに重要性を認める。にもかかわらず、従来の仏教研究の中ではほとんど考察の対象とされなかったこと（およびそういった研究の在り方）を批判している。このような観点から本書においては、密教における観音や歓喜天の信仰、密教と道教の習合、真言と手印、灌頂や護摩、水陸会などの儀礼の問題が論じられる。題名にある mandarins の語は、中国の高級官吏を意味し、ここから派生して北京官話をも指して言うが、ストリクマンによれば、本来は真言（mantras）を使いこなす官僚の謂であるという。目次は以下のとおりである。

Préface, pp.9-16; Introduction, pp.17-58.
I, "Incantations et eschatologie", pp.59-126.
II, "Sous le charme de Kouan-yin", pp.127-163.
III, "L'icône animée", pp.165-211.
IV, "Exorcisme et spectacle", pp.213-241.
V, "L'amour chez les éléphants", pp.243-290.
VI, "Les rêves et la divination", pp.291-336.
VII, "Le culte tantrique du feu", pp.337-368.
VIII, "Les banquets des esprits", pp.369-411.
notes, pp.413-491; bibliographie, pp.493-517; index, pp.519-554.

ストリクマンの遺著となった本書は昨年の10月に出版され、たちまちにヨーロッパの東洋学者や仏教研究者の間で評判になった。早くは Paul HARRISON 氏による紹介がなされており（*International Institute for Asian Studies Newsletter*, Leiden 1997, XII, p.35)、やがて多くの書評が内外の学術雑誌をにぎわすであろう。

［雑誌目次］

Journal asiatique, t.CCLXXXIV, no.1, 1996.
Éric PIRART, "Le sacrifice humain: Réflections sur la philosophie religieuse indo-iranienne ancienne", pp.1-35.
(ヴェーダとアヴェスタにおける人身御供の意味)
Jean KELLENS, "Commentaire sur les premiers chapitres du Yasna", pp.37-108.
(天使ヤザタとラトに関する『ヤスナ』の記述)
Mohammad Ali AMIR-MOEZZI, "Contribution à la typologie des rencontres avec l'Imām caché (Aspects de l'imāmologie duodécimaine, II)", pp.109-135.
(イスラム終末思想におけるイマームとの邂逅)
Victoria LYSSENKO, "La doctrine des atomes (*aṇu*, *paramāṇu*) chez Kaṇāda et Praśastapāda. Problèmes d'interprétation", pp.137-158.
(ヴァイシェシカ文献における元素の二つの概念)
François JACQUESSON, "Langues tibéto-birmanes du nord-est de l'Inde: Investigations typologiques en Assam et au Nagaland", pp.159-212.
(チベット・ビルマ諸方言に関する統辞論研究)
Sylvain VOGEL, "Le préfixe verbal *pan-* en khmer moderne", pp.213-262.
(近代クメール語の動詞接頭辞 pan- の強制機能)

Journal asiatique, t.CCLXXXIV, no.2, 1996.
Pierre LARCHER, "Dérivation lexicale et relation au passif en arabe classique", pp.265-290.
(古典アラビア語における受動態への動詞派生)
Éric PIRART, "Uraṇa n'a pas nonante-neuf bras", pp.291-299.
(リグ・ヴェーダが語る悪魔ウラーナの99本の腕)
SADAKATA Akira 定方晟, "Inscriptions kharoṣṭhī provenant du marché aux antiquités de Peshawar", pp.301-324.
(ペシャワール美術商将来陶器のカロシュティ文字)
A. MONTAUT, "La genèse des systèmes accompli et futur en indo-aryen", pp.325-360.
(近代インド・アーリヤ諸語の完了と未来時制)
Michel JACQ-HERGOUALC'H, Tharapong SRISUCHAT, Thiva SUPAJANYA et Wichapan KRISANAPOL, "La région de Nakhon Si Thammarat (Thaïlande péninsulaire) du Ve au XIVe siècle", pp.361-435.
(タイ南部ナコンスィタマラトのインド化時代)

T'oung pao, vol.LXXXII, fasc.1-3, 1996.
Christian LAMOUROUX, "Espaces du crédit et espaces rizicoles: la région du Jiang-Huai (X^{e}-XIe siècles)", pp.1-65.
(北宋時代江淮における稲作と経済空間の拡大)
Helen DUNSTAN, "'Orders Go Forth in the Morning and Are Changed by Nightfall': A Monetary Policy Cycle in Qing China, November 1744-June 1745", pp.66-136.
(「朝令暮改」— 乾隆帝時代の金融政策の転変)
Stefano ZACCHETTI, "Dharmagupta's Unfinished Translation of the *Diamond-cleaver* (*Vajracchedikā-Prajñāpāramitā-sūtra*), pp.137-152.
(未完の達磨笈多訳『金剛能断般若波羅蜜経』)
bibliographie/ Books Reviews
- William H. BAXTER, *A Handbook of Old Chinese Phonology*, Trends in Linguistics Studies and Monographs, LXIV (Mouton de Gruyter, Berlin and New York 1992), par Alain PEYRAUBE, pp.153-158.
- A. C. GRAHAM, *Disputers of the Tao, Philosophical Argument in Ancient China* (Open Court, La Salle, Illinois 1989), par Nicolas ZUFFEREY, pp.158-166.
- Hoyt Cleveland TILLMAN, *Confucian Discourse and Chu Hsi's Ascendancy* (University of Hawaii Press, Honolulu 1992), par Achim MITTAG, pp.167-184.

- Valerie HANSEN, *Changing Gods in Medieval China, 1127-1276* (Princeton University Press, Princeton 1990), par Barend TER HAAR, pp.184-194.
- Terry KLEEMAN, *A God's Own Tale: The Book of Transformation of Wenchang, the Divine Lord of Zitong* (State Universuty of New York Press, Albany 1994), par Robert CHARD, pp,194-197.
- HO Wai-kam and Judith G. SMITH (eds.) *The Century of Tung Ch'i-ch'ang, 1555-1636*, 2vols. (Washngton University Press, Seattle and London 1992), par Caroline GYSS-VERMANDE, pp.197-206.
- Noël GOLVERS (transl.), *The Astronomia Europaea of Ferdinand Verbiest, S.J. (Dillingen, 1687)*, Monumenta Serica Monograph Series, XXVIII (Steyler Verlag, Nettetal 1993), par Peter ENGELFRIET, pp.206-220.
- Robert A. BICKERS (ed.), *Ritual & Diplomacy: The Macartney Mission to China 1792-1794, Papers Presented at the 1992 Conference of the British Association for the Chinese Studies Making the Bicentenary of the Macartney Mission to China* (The Wellsweep Press, London 1993), par Ellen UITZINGER, pp.220-228.

T'oung pao, vol.LXXXII, fasc.4-5, 1996.
Yu-shih CHEN, "The Historical Template of Pan Chao's *Nü Chieh*", pp.229-257.
(後漢の班昭による『女誡』撰述の歴史的背景)
Victor XIONG, "Ritual Innovations and Taoism Under Tang Xuanzong", pp.258-316.
(玄宗の不老長生願望に基づく宮廷祭祀の刷新)
Carole MORGAN, "Inscribed Stones: A Note on a Tang and Song Dynasty Burial Rite", pp.317-348.
(唐宋時代の葬送儀礼における道教の石刻護符)
W. South COBLIN, "Northwest Reflections on the *Yunjing*", pp.349-363.
(中唐の長安における音韻体系の韻鏡への反映)
Charles E. HAMMOND, "Vulpine Alchemy", pp.364-380.
(中国文学に登場する「狐狸精」と道教の房中術)

bibliographie/ Books Reviews

- William G. BOLTZ, *The Origin and Early Developement of the Chinese Writing System*, American Oriental Series, LXXVIII (American Oriental Society, New Haven 1994), par Jeroen WIEDENHOF, pp.381-385.
- Martin KERN, *Zum Topos "Zimtbaum" in der chinesischen Literatur: Rhetorische Funktion und poetischer Eigenwert des Naturbildes* kuei, *Quellen- und Literaturverzeichnis*, Sinologica Coloniensia, Bd.XVIII (Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1994), par Jean-Pierre DIÉNY, pp.385-391.
- Paul F. ROUZER, *Writing Another's Dream, The Poetry of Wen Tingyun* (Stanford University Press, California 1993), par Michael A. FULLER, pp.392-397.
- Sabine WERNER, *Die Belagerung von K'ai-feng im Winter 1126/27: Nach Kapitel 64-69 des* San-ch'ao pei-meng hui-pien, *kompiliert von Hsü Meng-hsin*, Münchener Ostasiatische Studien, Bd.LXI (Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1992), par Stephen H. WEST, pp.397-399.
- Gerd WÄDOW, *T'ien-fei hsien-sheng lu; "Die Aufzeichnungen von der manifestierten Heiligkeit der Himmelsprinzessin"; Einleitung, Übersetzung, Kommentar*, Monumenta Serica Monograph Series, XXIX (Steyler Verlag, Nettetal 1992), par Barend J. TER HAAR, pp.400-404.
- Federico MASINI, *The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution Toward a National Language: Period from 1840 to 1898*, Journal of Chinese Linguistics, Monograph Series, VI, 1993, par Koos KUIPER, pp.404-407. （菊池章太）

フランソワ・ジュリアン著『無味礼讃』
興膳宏・小関武史訳
François Jullien "ELOGE DE LA FADEUR"

著者のジュリアン氏は、1951年生まれの哲学者。現在、フランスで最も活躍する哲学者の一人と言われ、パリ第七大学の教授でもある。もともとはギリシャ哲学を修め、アリストテレス哲学を専門とするが、現在は、中国の哲学・美学をも兼ねる。

本書は、「無味」Fadeurの哲学的考察というとかなり堅苦しくなるが、実際は平坦淡泊な無味が、いかなる味、すなわちいかなる事態にも順応していく利点を、中国の社会や芸術の中にとらえようとするエッセーである。つまり、ここでいう無味とはたんに食味だけをさすのではなく、中庸・中和という一見目立つことのない性格が、最上の価値（徳）を持つというのである。外面的には極めて平凡な形の中に、じつは最も充実した価値が存在する。われわれは、無味といえばすぐに、虚無・無為という道家の価値観に結び付けがちだが、ここでいう無味はそうした従来の思想とは、全く異なる知恵を与えるのである。つまり、儒家や道家の思想以外に、社会や文化の基盤となった基本的な価値観、それが「無味」なのである。

著者は、このことを中国の絵画や社会を例に挙げ論じていくが、しかし中国人自身は、かれらがこうした価値観に支配されていたとは気付いていない。従って、「無味学派」なる派系も存在しない。それなのに、この価値観は滔々として中国文化の底流に流れている。

充実した訳注が、知的探求をさらに支えてくれる。美味探求の書では味わえない極上のフランス風中華料理。平凡社。

（山田利明）

マルセル・グラネ『中国古代の舞踏と伝説』
明神　洋　訳
Marcel Granet "Danses et légendes de la Chine ancienne"

いまではグラネ(1884-1940) が1919年に出版した『中国古代の祭礼と歌謡』" Fêtes et chansons anciennes de la Chine " を知らぬ東洋学者はいない。1938年に内田智雄氏によって邦訳されて以来、『詩経』研究の基本的文献として広く愛読されている。1919年といえば第一次大戦後の処理のためのヴェルサイユ会議の年であり、この書が大戦の混乱を間にして書かれたことが知られるのである。訳者の「あとがき」によれば、グラネは15～18年にかけて出征し負傷している。強靭な意志の力と言わねばならない。

本書は前書の姉妹編として1926年に公刊されている。しかし、邦訳されなかったためか、本邦ではほとんど知られず、知る人ぞ知る幻の名著とされていた。前著が『詩経』を主題にして、特にその「頌」の性格や歌謡性を論じたのに対して、本書は、伝説に記された儀礼と演劇・舞踏の性格を明らかにする。いずれも社会学的観点から中国古代の社会を活写して余りある。本書の邦訳によって、グラネの古代社会研究の主要部が紹介されたことになる。

訳者の明神氏は少壮の中国学者である。この大著の完訳を祝うと共に、難解なフランス語を明快な日本語に訳出された努力に敬意を表したい。

せりか書房　　（山田利明）

彙報

日仏関連学会連絡協議会

昨年12月9 日年末恒例の日仏会館傘下の関連学会連絡協議会が、恵比寿の日仏会館で開催された。初めに傘下の25学会の活動報告があり、主には各学会の現状と昨年の催事・活動の状況が報告された。続いて会館委員から、会館の文化活動などについての説明があり、学会からの要望や計画が聴取された。特に、今年は日仏コロックの年に当たること、4 月から「日本におけるフランス年」が始まることなどから、諸行事への活発な参加が望まれる旨の要請があった。また、今回の日仏コロックはフランスを会場とするものの、開催地は限定せず、日本・フランスどちらでもよい、という状況にある。

以下は会館からのお知らせ。

○渋沢・クローデル賞

［日本側本賞］

川出良枝氏（放送大学助教授）

［ルイ・ヴィトン特別賞］

稲賀繁美氏（国際日本文化研究センター助教授）

［フランス大使館・エールフランス特別賞］

北　明子氏（小樽商科大学非常勤講師）

［フランス側本賞］

ニコラ・フィエヴェ氏（ＣＮＲＳ研究員）

○日仏会館研究員

Mlle Françoise CHAMPAULT

文化人類学

M. Christophe MARQUET

近代日本美術

M. Pascal GRIOLET

日本語学

以上

ドニ・ロンバール教授

フランス極東学院院長ドニ・ロンバール Denys Lombard 教授は、病気療養中のところ本年1 月8 日パリにて逝去。教授は昨年10月に発病し、加療中のところ今年になって容体俄かに改まって逝去された。

福井会長学術会議会員に選出

本学会会長福井文雅氏は第17期学術会議会員に哲学部門より選出された。

昨年5 月、学術会議会員推薦人会議において、日本中国学会、日本道教学会などの推薦を得て、会員に選出された。

第8 回日仏コロック

今年は3 年毎に開催される日仏研究集会（日仏コロック）の年に当たる。今回は日本・フランスいずれでも開催することができ、日仏関連の7 学会が参加する。期間も今年中の開催が認められている。

フランスで開催	
日仏社会学会	10月10日～24日
日仏経済学会	10月中旬
日仏図書館情報学会	9 月
日本で開催	
日仏数学会	
日仏教育学会	
日仏経営学会	5 月30日
日仏海洋学会	

総会報告

昨年度の総会は、１９９７年３月１５日に東京の東洋大学・白山校舎にて開催された。今回の総会は、福井文雅会長が１９９６年４月よりフランスに滞在中であったため、中谷英明会長代行と、興膳宏代表幹事および山田利明評議員が運営にあたった。また、当日は役員会と公開講演会が同大学内で、更に場所を移して懇親会が行われた。

＜役員会＞

総会に先立ち、午後１時から役員会が行われ、中谷英明会長代行をはじめ興膳宏代表幹事と山田利明、池田温、御牧克己、彌永信美、田中文雄の各評議員と森由利亜会計幹事が、総会に諮るべき事項と会務連絡などを検討した。

＜総　会＞

続いて午後３時から、以下のような次第で総会が行われた。

① 開会・議長選出

開会の辞は興膳代表幹事が述べ、中谷会長代行が議長に選出された。

② 会長代行挨拶

中谷会長代行が挨拶され、現在の会員数が１２０名であることを報告した。

③ 会務報告・計画

興膳代表幹事より、『日仏東洋学通信』と学術会議再登録の件、公開講演について、報告と計画を説明した。また、中谷会長代行より補足説明があった。

〔『日仏東洋学通信』〕

１９９７年２月に第２１号を発行し、１９９８年２月に第２２号を発行する予定である。第２２号については、なるだけ多くの会員から記事が寄せられるように希望している。

〔学術会議再登録の件〕

１９９７年５月に学術会議に学術団体の再登録を済ませ、学術会議会員の推薦人を中谷英明会長代行（予備の推薦人は山田利明評議員）とした。

〔公開講演〕

本年度の公開講演は、別記のように中谷会長代行に依頼し、明年度以降も公開講演を継続して計画している。

〔補足説明〕

日仏会館に関係する３０以上の学術団体によって運営される日仏会館関連学会連絡会議の経過と、ベルナール・フランク先生追悼会について報告した。

④ 会計報告・計画

別表の予算と決算を森会計幹事が報告した。

⑤ その他

次回の総会は京都を会場に行われることとなった。また、会員から以下のような情報の提供があった。

(1)彌永信美会員

日仏会館図書室活動を助けるため、「図書室友の会」が組織されているので、是非協力して欲しい。

(2)興膳宏代表幹事

渋沢・クローデル賞についての案内と、ギ・ガニョンGuy Gagnon氏の逝去の連絡。

(3)山田利明評議員

１９９７年７月にハンガリー・ブダペストで開催される第３５回ICANAS（国際アジア・北アフリカ研究会議）の案内。

＜公開講演＞

「古典学とコンピュータ　-インド学の場合-」

中谷英明

午後４時より、御牧克己評議員の講師紹介と司会により、上記の公開講演が行われた。詳しい内容については、講演者によって本通信に掲載される予定である。

＜懇親会＞

全ての公式の行事の終了後、場場を白山坂上の「長寿庵」に移し、夕食を兼ねた懇親の会を行った。総会から引き続いて参加下さった高崎直道先生（東方学会ICANAS会議参加団団長）に、受け入れ国側の会議の準備状況などの情報をお聞きし、有意義な懇談の一時を持つことができた。

（田中文雄記）

日仏東洋学会平成８年度決算

◇収入

普通会員会費	267,000	
前年度繰越金	343,397	
日仏会館補助金	0	
雑収入	20,000*	*備考：旧日仏会館使用料払戻金
利子	18	
計	630,415	

◇支出

印刷費	153,000
通信費	51,970
会議費	0
消耗品費	16,583
支払報酬費	6,000
雑費	1,130
旅費	50,000
	278,683

総収入－総支出：630,415 円－278,683 円＝351,732 円
平成8年度残金 351,732 円は平成9年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。
平成 9 年 3 月 9 日

日仏東洋学会監事

加藤純章

岡本さえ

日仏東洋学会
平成七年度決算報告

◇ 収入

普通会員会費	279, 000
前年度繰越金	545, 264
日仏会館補助金	0
利子	2, 706
計	826, 970

◇ 支出

印刷費	258, 000
通信費	134, 588
会議費	30, 000
消耗品費	1, 215
支払報酬費	6, 000
雑費	3, 770
旅費	50, 000
計	483, 573

総収入—総支出：826, 970 円—483, 573 円=343, 397 円
平成七年度残金 343, 397 円は、平成八年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。
平成8 年3 月14日

日仏東洋学会監事

加藤純章

岡本さえ

赤松　明彦
AKAMATSU Akihiko

秋山　光和
AKIYAMA Terukazu

ｱﾝｻｰﾙ、　ｵﾘｳﾞｨｴ
ANSART, Olivier

蘆田　孝昭
ASHIDA Takaaki

ｼｬｴﾘｴ、　ｲｻﾞﾍﾞﾙ
CHARRIER, Isabelle

竺沙　雅章
CHIKUSA Masaaki

ﾃﾞﾚｱﾇ、　ﾌﾛﾘﾝ
DELEANU Florin

ﾃﾞｭｹﾝﾇ、　ﾛﾍﾞｰﾙ
DUQUENNE, Robert

ﾃﾞｭﾙﾄ、　ﾕﾍﾞｰﾙ
DURT, Hubert

江上　波夫
EGAMI Namio

遠藤　光曉
ENDO Mitsuaki

藤枝　　晃
FUJIEDA Akira

福井　文雅
FUKUI Fumimasa

福島　　仁
FUKUSHIMA Hitoshi

ギメ美術館
Guimet(Musee)

濱田　正美
HAMADA Masami

羽田　　正
HANEDA Masashi

原　　實
HARA Minoru

服部　正明
HATTORI Masaaki

平井　宥慶
HIRAI Yuhkei

平川　　彰
HIRAKAWA Akira

廣川　堯敏
HIROKAWA Takatoshi

堀池　信夫
HORIIKE Nobuo

市古　貞次
ICHIKO Teiji

井狩　彌介
IKARI Yasuke

池田　　温
IKEDA On

生田　　滋
IKUTA Shigeru

石田　秀實
ISHIDA Hidemi

石田　憲司
ISHIDA Kenji

石上　善應
ISHIGAMI Zenno

石井　米雄
ISHII Yoneo

石澤　良昭
ISHIZAWA Yoshiaki

岩田　　孝
IWATA　Takashi

彌永　信美
IYANAGA Nobumi

彌永　昌吉
IYANAGA Shokichi

門田　眞知子
KADOTA Machiko

柿市　里子
KAKIICHI Satoko

金谷　　治
KANAYA Osamu

神田　信夫
KANDA Nobuo

狩野　直禎
KANO Naosada

加藤　純章
KATO Junsho

川合　康三
KAWAI Kozo

川本　邦衛
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ
KAWASAKI Michiko

菊地　章太
KIKUCHI Noritaka

木津　祐子
KIZU Yuko

小林　正美
KOBAYASHI Masayoshi

小谷　幸雄
KOTANI Yukio

古藤　友子
KOTOH Tomoko

興膳　　宏
KOZEN Hiroshi

栗原　圭介
KURIHARA Keisuke

楠山　春樹
KUSUYAMA Haruki

桑山　正進
KUWAYAMA Shoshin

京戸　慈光
KYODO Jiko

前田　繁樹
MAEDA Shigeki

丸山　　宏
MARUYAMA hiroshi

増尾伸一郎
MASUO Shin'ichiro

松原　秀一
MATSUBARA Hideichi

御牧　克己
MIMAKI Katsumi

三崎　良周
MISAKI Ryoshu

宮澤　正順
MIYAZAWA Masayori

森　由利亞
MORI Yuria

森賀　一惠
MORIGA Kazue

森安　孝夫
MORIYASU Takao

明神　　洋
MYOJIN Hiroshi

中村　　元
NAKAMURA Hajime

中村　璫八
NAKAMURA Shohachi

中谷　英明
NAKATANI Hideaki

成瀬　隆純
NARUSE Takazumi

成瀬　良徳
NARUSE Yoshinori

小河　織衣
OGO Orie

岡本　さえ
OKAMOTO Sae

岡本　天晴
OKAMOTO Tensei

丘山　　新
OKAYAMA Hajime

岡山　　隆
OKAYAMA Takashi

大久保泰甫
OKUBO Yasuo

小名　康之
ONA Yasuyuki

大谷　暢順
OTANI Chojun

尾崎　正治
OZAKI Masaharu

定方　　晟
SADAKATA Akira

齋藤　希史
SAITO Mareshi

坂出　祥伸
SAKADE Yoshinobu

酒井　忠夫
SAKAI Tadao

阪本(後藤)純子
SAKAMOTO-GOTO Junko

櫻井　清彦
SAKURAI Kiyohiko

澤　　美香
SAWA Mika

白杉　悅雄
SHIRASUGI Etsuo

白戸　わか
SHIRATO Waka

庄垣内正弘
SHOGAITO Masahiro

菅原　信海
SUGAHARA Shinkai

砂山　稔
SUNAYAMA Minoru

鈴木　董
SUZUKI Tadashi

高橋　稔
TAKAHASHI Minoru

高崎　直道
TAKASAKI Jikido

高田　時雄
TAKATA Tokio

武内　紹人
TAKEUCHI Tuguhito

田中　文雄
TANAKA Fumio

舘野　正美
TATENO Masami

徳永　宗雄
TOKUNAGA Muneo

礪波　護
TONAMI Mamoru

虎尾　達哉
TORAO Tatsuya

坪井　善明
TSUBOI Yoshiharu

都留　春雄
TSURU Haruo

梅原　郁
UMEHARA Kaoru

ﾜｯｾﾙﾏﾝ、ﾐｼｪﾙ
WASSERMAN,Michel

渡會　顯
WATARAI Akira

八木　徹
YAGI Toru

山田　均
YAMADA Hitoshi

山田　利明
YAMADA Toshiaki

山本　達郎
YAMAMOTO Tatsuro

山折　哲雄
YAMAORI Tetsuo

矢野　道雄
YANO Michio

吉田　敦彦
YOSHIDA Atsuhiko

吉田　敏行
YOSHIDA Toshiyuki

吉田　　豐
YOSHIDA Yutaka

湯川　　武
YUKAWA Takeshi

由木　義文
YUKI Yoshifumi

遊佐　　昇
YUSA Noboru

湯山　　明
YUYAMA Akira

編集後記

本学会は再発足以来今年で15周年を迎える。1984年3 月の第1 回総会は、氷雨降る中、御茶の水の日仏会館会議室で行われた。当時のヴァンデルメーシュ学長、今は亡き榎一雄会長（当時）、京都から駆付けた羽田明、大地原豊両先生のお顔もあった。

確かその総会の帰りであったと思う。1985年のパリでの第四回日仏コロックへの参加が話題となったのは。その後この話が熟して、翌年10月道教をテーマとした東洋学部会が、パリのフォンダシオン・ユゴーで開催された。そして、五回の東京・京都、六回のパリと続けて東洋学会は参加した。た。

15年の歳月は、それなりに重い歴史を刻んでいる。『通信』も本号で22号を数える。もう少し東洋学全般の情報を網羅したいのだが、やはり、専門に偏る弊がある。各分野からの積極的な投稿に期待したい。

［編集委員］

菊池章太・田中文雄・山田利明

投稿規定

会員諸氏からの投稿を募ります。東洋学各分野の動向・消息などをお送り下さい。打ち出し原稿の場合は

用紙：Ａ４

印字：10P

桁数：20字

行数：38行

を基準にして下さい。

日仏東洋学会 通信 第22号
1998年2月28日

編　集　日仏東洋学会

発行者　福井　文雅
〒162 東京都新宿区戸山1-26-1 早稲田大学
文学部　福井文雅研究室　TEL:03-3203-4141
Ext. 2482

発行所　〒606 京都市左京区吉田本町　京都大学文学部
興膳　宏研究室　TEL:075-753-2808
FAX:075-761-0692(京都大学文学部)

印刷所　六稜舎　〒530 大阪市北区浪花町9-12-402
TEL:06-371-1681